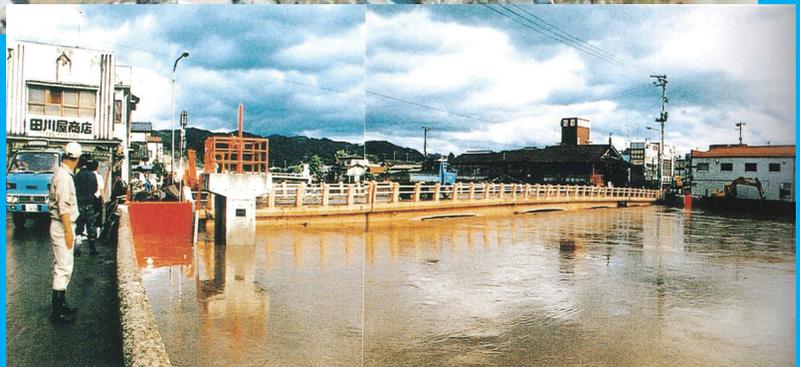


S61.8 洪水から30年
～逃がす・防ぐ・取り戻す～

「水害の教訓を後世に語り継ぐ」

～「昭和61年8月5日洪水から30年の取組」活動報告書～



平成29年1月

国土交通省 東北地方整備局
福島河川国道事務所

【表紙の写真】

上:昭和61年8月5日洪水の谷田川合流点の様子

下:冠水寸前の梁川町(現伊達市)広瀬橋付近の様子

【裏表紙の写真】

上:巡回パネル展の様子

下:「昭和61年8月5日洪水から30年」の座談会の様子

発刊にあたって



福島河川国道事務所

事務所長 石井 宏明

阿武隈川流域に甚大な被害をもたらした「昭和61年8月5日洪水」から今年で30年を迎えました。この間、地域の安全・安心を目指して抜本的な治水対策を実施し、治水安全度の向上を図ってきたところであります。しかしながら、当時の洪水による危機感インフラの整備や水害経験者の高齢化などにより薄れゆく傾向にあるとともに、昨今の異常気象や集中豪雨、爆弾低気圧によるゲリラ豪雨など、日本列島は今までに類を見ない災害の形が増加し、洪水被害が多発しているなかで、地域防災力の向上などが求められております。

このような状況の中で、過去の洪水を風化させず、後世に語り継いでいくことが重要であり、巡回パネル展や座談会などの各種取り組みを実施し、記録集に取りまとめました。今後の地域住民の防災意識の向上、さらには治水事業への理解と協力につながれば幸いです。

最後に、本取組にご協力いただいた福島県、関係市町村、（一社）東北地域づくり協会の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成29年1月

目 次

1. 全 体 概 要	1
2. 巡回パネル展の開催	2
・巡回パネル展の概要	
・パンフレットの作成	
・災害対策車の展示	
3. 座談会の開催	4
・座談会概要	
・座談会参加者	
・対 話 録	
参 考 資 料	27
・巡回パネル展使用パネル	
・パンフレットの見本	
・巡回パネル展アンケート集計	
・新 聞 報 道	

1. 全体概要

1:主旨

今年阿武隈川上流全域で甚大な被害に遭った「昭和61年8月5日洪水」から30年目にあたる。30年経った現在もまだ治水施設の整備は十分とは言えず、近年、局部的集中豪雨が多発、水害経験者の高齢化や水害を経験していない世代もあり、洪水の恐ろしさが薄れゆく傾向にある。

このような背景の中、忘れてはならない教訓として後世に語り継ぎ、今後の大規模出水時の避難等を含めた対応について考えるきっかけづくりを目的としてパネル展などを実施した。

2:主な取り組み内容

①巡回パネル展

- ・7/7～9/30にかけ、阿武隈川上流沿川10市町村の公共施設、駅、商業施設など、14箇所で開催。
- ・巡回パネル展にあわせ、パンフレットを作成、配付した。

②災害対策車の展示

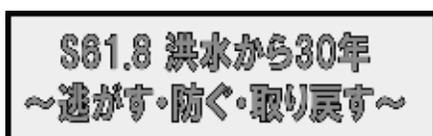
- ・巡回パネル展に並行して、伊達市と本宮市で実施

③座談会

- ・10/5に当時の関係者(被災者・消防団・行政)8名で実施

④名刺・会議資料等へロゴマーク使用による周知

- ・幹部の名刺や各種会議の次第等に、下図のようなロゴマークをつけ、話題提供することで周知した。



図：使用したロゴマークと活用例

【「逃がす・防ぐ・取り戻す」とは】

平成28年9月策定の『水防災意識社会 再構築ビジョン』に基づく阿武隈川上流の減災に係る取組方針に基づき、今後5年間に阿武隈川上流で発生しうる大規模水害に対し「逃がす・防ぐ・取り戻す」取組みを進めることで防災意識の向上、被害の最小化をめざす。

※逃がす…流域住民が主体的に水害リスクを把握し、避難につながる住民目線のソフト対策が必要です。

※防ぐ…地域の水防力向上を図り、氾濫被害の防止や軽減、堤防決壊を少しでも遅らせ避難のための時間を稼ぐことが必要です。

※取り戻す…大規模な浸水が長期に及んだ場合に、1日でも早く日常生活を取り戻すための対応が必要です。

3:その他

○本取り組みは、流域首長からなる「阿武隈川上流大規模氾濫時の減災対策協議会」での取り組みと位置付け、阿武隈川上流直轄区間の沿川10市町村及び福島県と連携して実施しました。

○この取り組みにあたり、一般社団法人東北地域づくり協会から「みちのく国づくり支援事業」として支援・協力をいただきました。

○本報告の詳細は下記ホームページでも公開しています

(http://www.thr.mlit.go.jp/fukushima/abukuma_gensai/30torikumi.html)

2. 巡回パネル展の開催

1:巡回パネル展

昭和61年8月5日洪水による大規模災害発生から30年の節目にあたり、水害の風化を防ぎ、あわせて地域住民の防災意識の向上を目的に、公共施設等でパネル展を実施した。

パネル展は7月7日福島県庁を皮切りに、阿武隈川上流沿川全10市町村・14ヶ所で開催した。

市町村	開催場所	開催期間
福島市	福島県庁 2階渡り廊下	7月7日～7月22日
郡山市	郡山市役所 庁舎内ギャラリー	7月12日～7月29日
伊達市	伊達市役所 保原本庁舎シルクホール	7月22日～8月1日
本宮市	本宮市民元いきいき応援プラザ えぼか	7月22日～8月9日
福島市	JR 福島駅 2階東西連絡通路	7月29日～8月9日
伊達市	伊達市役所 梁川分庁舎	8月1日～8月17日
伊達市	ヨークベニマル梁川店	8月9日～8月17日
二本松市	市民交流センター	8月9日～8月23日
国見町	観月台文化センター	8月17日～8月29日
大玉村	農業環境改善センター	8月23日～9月2日
桑折町	桑折町役場	8月29日～9月7日
玉川村	就農改善センター	9月2日～9月15日
福島市	福島市子どもの夢を育む施設 こむこむ館	9月7日～9月30日
須賀川市	中央公民館	9月15日～9月30日

※使用したパネルは28ページ参照

2:開催状況



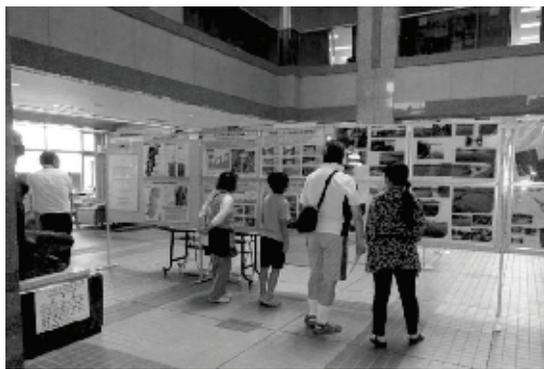
7月7日 オープニングセレモニーでの挨拶
石井事務所長(左)、前田土木部次長(右)
(国土交通省) (福島県)



福島県庁2階渡り廊下での展示



須賀川市 中央公民館での展示



伊達市 梁川分庁舎での展示

3: 並行した取り組み

●パンフレットの作成

昭和61年8月5日洪水の概要、その後の治水対策、最近の取り組みをまとめたパンフレットを各巡回パネル展会場に設置した。

※パンフレットの見本は34ページ参照



●災害対策車の展示

巡回パネル展と並行して、下記の日程で災害対策車の展示を行った。

- | | |
|---------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 開催場所 | ① 伊達市 梁川分庁舎駐車場
② 本宮市 本宮市民元気いきいき応援プラザ えぽか |
| 2. 開催期間 | ① 平成28年8月4日(木)10時～5日(金)16時
② 平成28年8月5日(金)10時～6日(土)16時 |
| 3. 展示内容 | ① 排水ポンプ車 30m ³ /min(高揚程)、照明車 各1台
② 排水ポンプ車 30m ³ /min(高揚程)、照明車、対策本部車 各1台 |



展示状況

(左:伊達市、排水ポンプ車 30m³/min(高揚程)(前)、照明車(後) 右:本宮市、対策本部車)

3. 座談会の開催

1:概要

目的 本座談会は、昭和 61 年 8 月 5 日洪水の記憶を風化させず、後世に語り継ぐことが大切であり、また、地域住民の防災意識を高めること、さらには治水事業の啓発を目的として開催した。

開催日時 平成28年10月5日(水) 13:30～15:30

開催場所 杉妻会館 2階「芙蓉の間」

2:参加者

氏名	当時のお住まい	ご職業等 (上段:当時、下段:現在)
さとう しょうじ 佐藤 昭治氏	伊達市(旧梁川町)在住	梁川町役場職員 伊達市社会福祉協議会会長
かねこ みつお 金子 三男氏	伊達市(旧梁川町)在住	被災者(自営業) 自営業
わたなべ ゆきただ 渡辺 之忠氏	福島市在住	福島市消防団団員 自営業
こくぶん よしのぶ 國分 良修氏	本宮市(旧本宮町)在住	本宮町消防団団員 自営業
ふるや ただし 降矢 正氏	郡山市在住	被災者(郡山市役所職員) 町内会会長
むらかみ いちろう 村上 一郎氏	郡山市在住	郡山市役所職員 郡山市役所職員
なかざわ しげかず 中沢 重一氏	二本松市在住	福島河川国道事務所職員 防災エキスパート
いしい ひろあき 石井 宏明		— 福島河川国道事務所長

司会 : さとう かつみ 佐藤 勝美 福島河川国道事務所 副所長(河川)

事務局 : なかの たかし 中野 孝 福島河川国道事務所 建設専門官

3: 座談会

注: 座談会で使用した説明資料は下記ホームページで公開しています

(http://www.thr.mlit.go.jp/fukushima/abukuma_gensai/30torikumi.html)

司会 ただいまより、昭和 61 年 8 月 5 日洪水から節目の 30 年座談会を開催します。本日司会を務めます、福島河川国道事務所、河川担当副所長佐藤です。よろしくお願いいたします。

座談会に入る前に、配布資料の確認です。次第、続きまして資料 1、資料 2、合わせて 3 セットお配りをしております。

それでは、開催の前に、本日録画・録音をさせていただいております。最終的に取りまとめをさせていただいて、広く広報に活用させていただく予定ですので、皆様方のご理解を賜ればと思います。

まずは挨拶を福島河川国道事務所長石井から行います。

石井 福島河川国道事務所長の石井です。本日はお忙しい中、本座談会にお集まりいただきまして大変ありがとうございます。また、日頃から国土交通行政に対しましてご協力とご理解をいただいております。改めて御礼を申し上げたいと思います。

今回の座談会は、戦後最大の洪水である昭和 61 年 8 月 5 日洪水から 30 年という節目で開催させていただくことにしました。30 年が経ち、世代も変わりつつあり、どうしても洪水の記憶も薄れてしまうことに危惧しているところでございます。そういった中で、当時を知る方々のお話を伺って、また地域の方の意識を高めていきたいということがございます。

もう 1 点は、単に 30 年ということだけではなくて、近年の水害のリスクの高まりも開催の背景になっています。全国的にも集

中豪雨の回数・頻度が高まっておりますし、直近だけ見ましても、昨年は関東・東北豪雨があり、今年も岩手県岩泉町で大きな被害が出ている状況でございます。阿武隈川でも、8 月 2 日に集中豪雨があり、その後台風も 7 号、9 号、11 号、15 号と発生しており、非常に水害に対する危機感・緊張感のあるところでございます。そういった時期に本座談会が開催できるというのは、非常に大きな意義があると思っております。今回、皆様方の経験を伺って、また当時を踏まえた形で今後のお話も頂いて、我々も今後の参考に進めていきたいと思っておりますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。



司会 それでは次第に基づきまして、「昭和 61 年 8 月洪水の概要」に移らせていただきますが、ご出席の皆様方の紹介については、後ほど自己紹介を兼ねてお話を頂くことで考えておりますので、配布資料の名簿で代えさせていただければと思います。

ただいまより事務局から、パワーポイントを使いながら、当時を思い起こしていただくということ、或いは最後の方では、伊達市さんでとりまとめた映像を、今回少し編集をさせていただいた動画により、当時

を振り返っていただきたいと考えております。

事務局 福島河川国道事務所建設専門官の中野です。どうぞよろしくお願いいたします。

昭和 61 年 8 月 5 日洪水についてですが、4 日の夜から 5 日朝にかけて、台風 10 号崩れの温帯低気圧が関東から東北の各地に記録的な豪雨をもたらした洪水でありました。福島県内では吾妻山系で 400 ミリ、福島観測所では、明治 22 年の開設以来最大の豪雨 264 ミリを記録した洪水です。その豪雨により阿武隈川では須賀川観測所、郡山市の阿久津観測所で計画高水位を超えた洪水となりました。国の管理区間では、伊達市を流れる支川広瀬川で 2ヶ所の破堤、県管理河川では郡山市を流れます逢瀬川、谷田川で破堤するなど、各地で甚大な被害が発生しております。

この大雨による各地の被害は、福島県阿武隈川流域で死者 3 名、住家の全半壊 56 棟、床上・床下浸水、約 14,000 戸あまりが被害を受けております。次ページが当時の 4 日から 5 日にかけて降った雨の等雨量線図になっております(図1)。250 ミリのところを赤いラインで囲ってあります。赤いラインの内側が 250 ミリを超えている範囲、福島の 264 ミリというところを含めて、吾妻山で最高で 400 ミリ程度、白河や県内の上流域

や阿武隈高地側でも 250 ミリを超えるような雨が降っております。

資料の 3 ページに時間あたりの降雨と、伊達市にある伏黒観測所の水位流量曲線をつけています(図2)。最近では局地的豪雨、或いはゲリラ豪雨といわれる、時間 50 ミリを超えるような激しい雨が頻繁に発生しておりますが、この昭和 61 年洪水については、時間雨量で一番多くて 1 時間あたり 36.5 ミリと、最近の雨の降り方としてはそれほど大きくはありません。しかし、総雨量では阿武隈川流域全体にまんべんなく 200 ミリから 300 ミリという雨が降ったという点が、昭和 61 年洪水の降雨の特徴となっております。この雨を受け、阿武隈川では 5 日未明から水位が上昇してきております。当然市町村、場所によって違いますが、この伏黒観測所では 5 日の 4 時に水防団の出動ということで、水防警報の発令をしております。8 時で水位のピークを迎えまして、伏黒観測所で 5.2m、雨のピークが過ぎて 3、4 時間経ってからです。この 8 時の水位ピーク時に広瀬川の舟場地区で 1 箇所堤防決壊が発生しました。その後ピークが若干過ぎた 11 時頃、広瀬川の町裏地区で 2 箇所目の破堤をしております。

次ページが昭和 61 年の阿武隈川上流での浸水エリア、浸水状況の写真を示したも

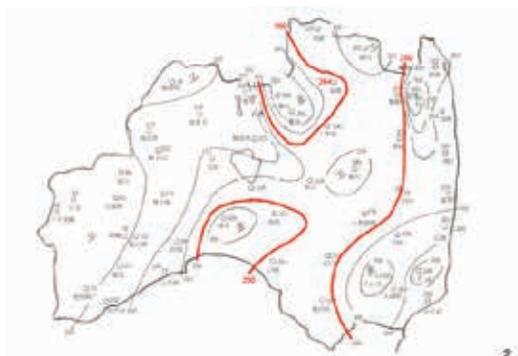


図 1 8.5 水害時の等雨量線図

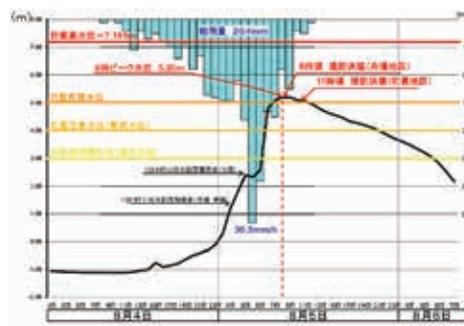


図 2 伏黒水位観測所の水位曲線および福島地点の降雨量変化

のです。広瀬川の浸水エリアを表示した写真に、国の区間で破堤した2箇所を赤色の「×」で示しています。

次ページが本宮市、二本松市周辺の国管理区間の氾濫エリアで、ここもかなりのエリアで浸水被害が発生しております。次ページに、郡山市から須賀川市にかけての氾濫エリアを表示した図面写真になっております。ここでも支川の逢瀬川と谷田川の所に赤色の「×」が2箇所つけてあります。ここが破堤被害が生じた箇所です。

続きまして、当時の映像をご覧くださいと思います。これは伊達市旧梁川町で撮影・編集されたものをお借りして、2分ほどに短く編集したものです。これは支川広瀬川の洪水状況になっております。もう橋桁ぎりぎりまで増水しています。これが8月5日の朝の阿武隈川本川になります。ここが舟場地区の破堤した所で、水が入ってきています。こういった状況で、各地で浸水被害が発生しておりました。ここが舟場地区で堤防を越水して、裏法からだんだん堤防が欠けていき、破堤してしまった状況です。破堤した箇所から水が勢いよく町中の方へ流れて入ってきているのが見てとれます。これは一面、1階部分が水没してしまうような浸水被害が生じてしまった市街地の状況になります。避難が若干遅れた方達も腰まで水に浸かりながら歩いて避難されておりました。今回の映像にはありませんが、舟で救出されたというような状況なども、かなり記録として残っております。

支川広瀬川は、当時はパラペットというコンクリートの壁を立てた堤防でしたが、計画高水位よりも低い堤防でした。ここを越水し、かなりの浸水被害が生じてしまい

ました。今映っていた黄色い看板の所が、本日参加していただいております金子さんのお店です。

今、見ていただいた映像は伊達市旧梁川町の映像ですが、当時の状況としましては福島市南町地区、あるいは本宮市、郡山市などでも同じような状況が発生しているという出水でした。

司会 それではこれより座談会に入らせていただきます。ここからは、座長を当事務所の所長であります石井が務めさせていただきます。

座長 それでは私の方で座長という形で進めさせていただきます。座談会の進め方ですが、二部構成という



石井 宏明

ことで、前半に当時の状況などについて皆様にご発言頂き、途中事務局からの説明を挟みまして、今後の水害対応についてのご意見等という二部構成でやらさせていただきます。それでは順番に、簡単な自己紹介の後に、当時の状況について皆様からお話を頂きたいと思います。だいたい一人3分程度でお願いします。

それでは私の自己紹介からはじめさせていただきます。この4月に福島河川国道事務所の所長で参りました石井と申します。福島県の勤務は初めてで、出身は埼玉県になりますが、利根川の近くが地元です。これから順番に自己紹介と当時の話をお願いいたします。

では村上さんからお願いします。

村上 村上
一郎と申し
ます。私は
郡山市役所
に勤務して
おり、入っ
たのは昭和
55 年にな
ります。昭
和 55 年と



村上 一郎さん

いいますと、12月24日に記録的な豪雪がありまして、県内では木が倒れ停電になりました。私は、当時、水道局に職員としていました。停電により断水となったために、自衛隊と一緒に水を配っておりまして、家に帰れたのは12月31日だったという事があった年でした。

昭和61年の時は、下水道管理を担当しておりました。8月5日の朝方に、逢瀬川近くの現場に向かいました。現場に着くとすぐ「今、どこにいる」との無線が入りました。「富久山町に来ました」と応答すると、「堤防が切れている。大丈夫か」との連絡が入りました。実は、その時、堤防が切れた箇所から500mのところのいたものですから、もう少し逃げるのが遅ければ「助けて下さい」という状況になっていたと思います。

私事ではございますが、昭和61年8月5日洪水のすぐ後の9月に長男が生まれました。一番下の子は、平成10年に生まれたのですが、その年の8月にも大きな水害がございました。うちの子供たちは、大きな災害の年に誕生しておりますので、私も当時の記憶がはっきり残っているところがございます。私は、市役所に務めて37年になり、防災関係の仕事に携わる職が多かったの

ですが、最初の大きな災害がこの8.5水害でした。その後も多くの災害を経験する一方、火山等を含めて、6回ほどハザードマップを作らせていただきました。

そのようなことから、この座談会の中で、ハードと、避難等のソフトの両面につきまして、経験をもとにお話ししていきたいと思っております。

簡単ではございますが、これで自己紹介とさせていただきます。

降矢 私は郡山市の水門町に住んでおります。水害当時は郡山市役所総務課の職員係にいました。5日の朝4時頃起きたら、一部が水害になっている状況でした。先ほど事務局から説明がありましたように、町内の状況を含めて説明させていただきます。平成22年から水門町の町内会長を仰せつかっていますので、その辺を含めて、もしかして隣の部長が「ここは違うんじゃないか」とかあるかも分かりませんが、説明させていただきますと思います。

私どもの地区は、ちょうど郡山駅から東に2キロの地域にございます。西側に今お話に出ていますように阿武隈川、東側に阿武隈川の支川の谷田川と、大滝根川、ご承知のように上流に三春ダムも控えております。かなりの台風とか大雨になりますと、陸の孤島になる所です。世帯は去年の国勢調査で約690世帯ございます。水害当時は300世帯で、殆どが町会に入っており、目に見える所でしたが、今も町会の数は300ちょっとで増えておりません。増えている要素は殆どが集合住宅で、もともと町内に住む方というよりは、転勤族が住んでいる状況です。それで水門町、隣の南側に中央工業団地、一番被害が大きかった工業団地を控えておりましたので、その辺を説明さ

せていただきたいと思います。

ご承知のように、台風 10 号崩れで温帯低気圧により記録的な豪雨になっております。8 月 4 日から 5 日にかけて、5 日の午前中だったと思うのですが、集中水害になりました。市内を流れる阿武隈川の支流の谷田川など各所において、堤防が破れ、越水し大水害となったのが現状です。5 日の 6 時 20 分頃だと思っておりますが、谷田川左岸の大河原、これは工業団地と水門町地内の一部から越水が始まりまして、9 時頃は上流の田村町という地域があるのですが、この上行合の大橋の下流、約 20m の堤防が決壊しました。その氾濫水が一番被害が多かった中央工業団地。そして水門町を押さえ、その浸水結果は、浸水面積約 242 ヘクタール。浸水した宅地等を含めると 340 万㎡位の宅地になります。水門町地区は特に一番低い所なので、3 m 以上の浸水になり、1 階の殆どが被害を受けております。300 世帯の中で 1 軒だけが無事でした。そこが現地の対策本部になった経過もございます。



降矢 正さん

この原因というのは、私素人なんです、以前に両岸谷田川と大原地区における堤防が 1928 年の昭和 3 年から 34 年までかけて作られた旧堤防なんです。これは多分ご承知だと思いますが、浸水した地域は阿武隈川の旧河川の一番低い所だったんです。

これが当時は飛行場の跡でした。また谷田川の洪水のピークも、観測所の約 200m 程度下流が破壊したため、時刻が定かではないんですが、水の流れは殆ど変わりなく、破堤したのは夜 10 時頃だったと思います。水害の概要はそういうことです。

渡辺 渡辺之忠です。元福島市消防団員でした。私は第五分団とって福島市の南側、ちょうど阿武隈川の三角州、南町、清明町、柳町の町会を担当しておりましたが、この南町地区は洪水の常習地区とでも申しましょうか、三角州のために低めにありますので、水害が発生しやすい所です。お陰様で福島市は、阿武隈川の堤防はかなり堅固なものを作っていただいておりますので、堤防破堤という心配はほぼないのですが、雨がひどいことから私達も地域住民に警戒して避難の準備をしてもらうため、4 日の夜から 5 日の早朝にかけてパトロール広報をしていました。

そして、5 日の朝 4 時頃からものすごい水量で、この写真にもある通り、南町地区はほぼ全滅です。先ほどもおっしゃったように水位は 4 m、深い所では 5 m という水位だったと思います。殆ど屋根まですっぽりと入っておりました。それで私達が広報したにも関わらず「目覚めたら手が冷たかった」といって、市に苦情を言う町民が大勢いました。と同時に、私達も避難が遅れた住民が約 400 人ちょっといらっしまったので、その方達を救出する方法を考えましたら、たまたま自衛隊さんがボートを持って応援に来ていただいたので、400 人の方々を無事に搬送できました。後ほど自衛隊を無断で出動させたために、私大変各方面から叱られまして、時効になったと思いますので今申し上げます。

南町というのは水害常襲地のために、当時から町内活動が大変しっかりしておりまして、水



渡辺 之忠さん

害の時に高齢者、避難が容易でない方々を早く避難させるべく、そういった役員さんが団結してやっておりました。もちろん私も入って消防本部のご理解を得て、救急車で寝たきりとか高齢者の方を病院の協力を得て搬送したんですけども、水害が終わったら今度は帰りの足どうするんだと、タクシー代出せという話をいただきまして、我々にはそういう出す手段が無いので、困った経験もございます。簡単ですが、大変大きな水害でありました。

国分 本宮市在住の国分良修です。今年3月まで本宮市の消防団長を務めさせていただきました。



国分 良修さん

当時私 20代後半、分団では中堅になろうかという7年目ぐらいの年だったと思うんですが、この水害に遭いました。それで旧本宮町、皆さんもご存じのように町内に安達太良川が通っております。阿武隈川に接する安達太良川には当時合流点に水門がございまして、その水門を閉めるという状況がありました。当然内水により安達太良川の水が町内に越水しました。必死に私達も法面の漏水している部分に土嚢を積んだりいろいろしたん

ですが、最終的には越水して町の中へということになりました。東側につきましては、言葉はあまりよろしくないですが、暗黙の了解で遊水地という考えもありましたので、東側高木地区については例年といいますか、洪水の時には遊水地の役割を果たしている状況でありました。その時の私の気持ちは、入団7年目の団員ですので、初めての経験であり、阿武隈川の水がパラペットより表面張力で盛り上がり流れてくる状況を初めて見ました。その時、まさしくすごい状況だったなど、今さらながらに感じるころです。

金子 金子三男と申します。伊達市梁川町で中華料理「ちんめん」という店を創業以来48年間頑張ってます。まだ現役でございます。



金子 三男さん

さっき映りました私の店の看板が8.5水害の時に一番目立ちまして、このたびもNHKの記者の方がうちの店に食べに来て、カウンターの前に座って「水害どうでした」なんて言うから、いろいろ話したら、「じゃテレビにちょっと出演お願いします」なんて、NHKのニュースでちょっと映して説明させてもらいました。

私は店が広瀬橋のたもとで、自宅は離れていて伊達町の箱崎なんですけど、店にも泊まれるんですが、その日は自宅におりまして近所の方から電話をいただいてびっくりして、店に駆けつけたんです。女房と2人で長靴履いてバケツを持って、店に向か

いました。そして広瀬橋が渡れなくて上の観音橋という小さい橋、そこが何とか渡れて、やっと店にたどり着いたんですけど、店はもう軒下まで水いっぱい、やっと2階の窓から入って階段から下りて店を見た時は、もう冷蔵庫は浮いているしテーブルも全部浮いている。初めて経験して6畳の部屋の畳が、そっくりテーブルが上がったまま浮いていて、あれにはびっくりしました。もうどうしようもなく、諦めて水が引かないとどうしようもないと思って家に帰りました。あの時は水の量はすごかったです。

佐藤 佐藤昭治と申します。当時梁川町の対策本部の指揮官を務めさせていただきました。朝の6時から午後2時半までノンストップで、水害の状況の中で、対策本部の全軍団を指揮する場合の厳しさといいますか、頭が混乱するぐらいでした。本番ですから。先ほどのお話にもありましたように、あの時の洪水の驚きといいますか、それを若干冒頭に申し上げてみたいと思います。先ほどご説明いただいた内容とちょっとずれますけども、本番の梁川町の分析なので、誤解のないようにお聞き取りいただきたいと思います。

まず朝の5時から6時の間に、1時間に1m4cm上昇。次も6時から7時まで1m上昇。



佐藤 昭治さん

その後30分で50cm上昇ですから、2時間半で2m50cm上昇と驚異的な記録でした。私も役場に奉職して30回ぐらいの水害を体験していま

すが、異常な降雨量であったということです。旧梁川町は、阿武隈川の最北端、福島県の一番下流ですから、梁川橋の流下断面で引き受ける水は毎秒7800m³/sです。それでなぜそうなったのかというのは、昭和61年8月5日洪水時の温帯性低気圧は、阿武隈流域全体に雨を降らせ、白河、阿久津、本宮云々の水位で見ますと、異常な上昇でした。対策本部は第1次体制を1時に発したんですが、3時過ぎあたりに上流の水位情報がどんどん入ってくるんですよ。今まで体験したことのない、危険水位に達しておりますので、これは穏やかではないということで、3時55分には第2次体制、第3次体制を同時に発令し、体制を整え6時58分に舟場、塩野川避難命令発令しましたが、舟場堤防が越流7時40分、8時に決壊しました。続いて町裏が10時56分越水、決壊が11時20分ですから、越流して決壊するまで10分から20分きりもたないんです。防災活動、防止対策は時間的に不可能でした。記録的豪雨によって、未曾有の甚大な洪水冠水大災害となったのであります。避難の仕方は普通の伝達では間に合いません。ああいう有事の場合に一番いいのは、半鐘か消防車のサイレンでびっくりさせるということです。なぜかというと、サッシ戸ですからテレビを着けていると殆ど一般の広報の「避難して下さい」では通用しなかったということを感じております。

それから今日はお呼びいただいたので、あれ以来十何年間、新生梁川町を作っていたいただいたのは、禍転じてと言うと申し訳ないですけども、あの激特事業があって、皆さんのお世話になったからこそ、旧梁川町の水光る今の姿があるものと、深く感謝しております。当時を今日しばらくぶりに思

い出して見たいと思っております。間もなく八十路の坂を上る年代ですから、今日一番年配なのかなと思って、喜んで参加させていただきました。よろしくお願いいたします。

中沢 中沢と申します。

私は昭和45年に当時の建設省福島工事事務所に採用されて、その後4回ほ



中沢 重一さん

ど福島の事務所に勤務させていただきまして、この8.5水害の時はちょうど10年ぶりの7月に福島の調査課に戻ってきた直後に起きた水害で、被害の状況は皆様方が話して下さったように、個人的には本当にとんでもない事態に巻き込まれたなというのが実感でございます。中でも一番記憶に残るのは、やはり広瀬川の激特事業、また南町の内水排水事業と、これらの対策の事業に携わったということが一番記憶に残ることでございました。

その後も平成の大改修やら二本松の治水対策や、梁川の狭隘地区の治水対策等を担当させていただきました。私個人、役所生活の半分以上を阿武隈川の事業に関わろうとは思ってもいなかったんですが、生まれも育ちも二本松なものですから、非常に阿武隈川に縁の深いところだということでこれらに携われたという事を誇りに思っています。現在は東北地方防災エキスパートの他、水防専門家として、今後も阿武隈川の防災・減災に役立っていきたいと思っております。今後よろしくお願いいたします。

願いたします。

座長 ありがとうございます。自己紹介を兼ねて、当時の状況について皆さんにお話をさせていただきました。当時の被害の状況ですとか、生々しい洪水時の状況がよくわかりました。それぞれ皆さん市役所だったり水防団だったり、立場は異なるわけですが、次にご発言頂きたい内容としては、当時情報伝達の面でどうだったかというので、良かった所、悪かった所があるかと思いますが、当時の発災した時の情報伝達の部分で少し絞って、ご経験をお話し頂けるとありがたいと思っております。それでは、市の職員の立場という関係で、村上さんからご発言頂けるとありがたいです。

村上 私は、当時、市役所に入ったばかりで、まだ若かったものですから、水害史を作った時の代表であります隣の降矢さんのほうが大変詳しいと思いますが、反省も含めて話します。

郡山市は、それまでは年間降水量が1,000mm ちょっとくらいであり、戦後、水害はそれほどありませんでした。このため、職員も住民の方々も災害を経験してこなかったため、どうしたらよいかがわからない状態にありました。職員の動きも防災計画書にはあったのですが、住民の方々に情報を伝達するのが遅かったなど、残念ながら不満足な結果となってしまいました。

当時の細かい状況は、降矢さんをお願いしたいと思います。

座長 続きまして降矢さん、願いたします。

降矢 被災者である立場からすれば、まず災害対策本部で、前に設置したのが、昭和16年の大災害以降なものですから、その経験者が殆どゼロに近い。職員も経験ゼロで

した。なおさら水害になろうとする区域の方も、極端に言えば隣に水が上がってきてもあまり感じないような、これはうちの地区としてですが、だいたい朝4時頃から次の日までであったんですが、よその所を見て「ああ、うちも来たな」といって泳ぎながら、荷物を出すような状況だったので、まず被害に遭ったために何をしようかがまず理解できなかったと思います。具体的に言いますと、5日の午後4時が初めて災害対策本部設立です。これは立場から言えば本当はお話ししたくないですが、現地対策本部が一番被害の多かった水門町くらいしか置かなかったと思います。これも排水というか、堤防を切ったり自衛隊等の専用の機械等で排水した後なんです。極端に言えば何もできなかったということです。



あともう一つは、通常ですと市町村の災害対策本部から退去命令とか避難命令が出ますが、水門町に限れば、警察の方から退去命令なんです。その当時は屋根に上がったり、水に浸かったりして避難を待つ人がかなりおりました。救助に1日半くらいかかっております。排水は8月12日までかかりました。水が引けるということで、谷田川の堤防がやっと県の了解を頂いて切ったのが6日だったので、それから一番低い所、十貫川の飛行場跡という所が一番低いんです。ここの水引けるのが、最終的には12日

の5時までかかりました。これも自衛隊、警察の出動を受けてですので、あの辺に工業団地がありましたので、そういう状態です。たぶんうちが一番長く水に浸かっていたと思うんです。そういう経過がございます。

座長 渡辺さん、あとで別の質問をしたいと思いますので、続けて国分さんお願いします。

国分 私は先ほど言いましたように、伝達方法等については消防団活動をしておりましたので、私達については移動無線で逐次情報を得ていたということになります。ただ住民の方については、旧本宮町については大サイレンというのがありまして、火災、そして水害等に被害が甚大になる時に全域に聞こえる大きなサイレンがあるんですが、そのサイレン等での吹鳴等ぐらしか当時はなかったのかなと考えております。

現在市役所の方から当時の資料を私も色々頂いたんですが、市役所の中でも旧本宮町の中でも、いろんな出来事に対処するのに精一杯だったというような記録が残っているのを拝見いたしました。私自身としては、当時については水防団活動としてやっていたので、伝達方法等につきましては、そのぐらしか私は理解しておりません。

座長 ありがとうございます。金子さんと渡辺さんには後ほど避難の状況等をちょっとお聞きしたいと思いますので、先に佐藤さんの方で当時の対策本部で指揮をとられたというところも含めまして、情報伝達の面で少し補足をしていただければと思います。

佐藤 実は昭和55年に、県会議長を辞めた後に衆望を担って梁川の町長となった池田

町長が、昭和 27 年洪水時に船場の決壊場所の堤防上に立って、天端すれすれの洪水位を視察した折、災害時の現状報告は 2 人体制で行っておったため、今の時代何をしているのかとお叱りを受け、訓令で昭和 58 年 7 月 15 日に職員防災活動要綱を制定、そして 15 キロ飛ぶ防災無線を 67 台設置し整備しました。そして毎年訓練を実施しておりましたので、瞬時の対応ができたものと思っております。

先程申し上げましたが、堤防決壊時の緊急避難広報車のマイクの広報は余り効果がありませんでした。半鐘の連打と、消防車のサイレンは効果がありました。何といっても戸別訪問で自主防災会、職員、消防団、福祉関係者の人海作戦が大事であると痛感いたしました。

座長 ありがとうございます。情報伝達の観点で、色々当時課題もあったというところが分かったと思います。それについてまた後半の方で、今後のあり方をもう少し重ねて議論したいと思います。

今、佐藤さんから避難のお話も出ておりましたが、情報伝達の次に避難の状況について、金子さんからは実際お店が浸かって避難をされていた経験や、周りの方々の様子などをちょっとお話ししていただければと思います。渡辺さんからは、先ほど自衛隊の出動要請の話や救急車のお話とか、たくさんの方々を避難させた際のお話を、もう少し詳しく頂きたいと思います。

渡辺 自分達で避難しようという意識を持たせるのは、なかなか難しいですし、やはりどうしてもよその人と一緒という感じがす。自分達の命は自分達で守るというのが基本だろうと思っているのですが、避難は誰かが避難させてくれると思っています。

緊急時になりますと行政も人の個人的な避難まで手伝っていることができませんので、やはり地元の消防団とか、あるいは防災活動をしている方の手を借りるような形になると思いますが、なかなか号令かけても右向く人が少ないような気もしていました。実際避難がどうにもならなくて、市に電話して本部から出動してきてボート出したら、「俺ら何遍も言ったんだから手伝うな」と言いたいくらいのことを思っていました。あと高齢者や寝たきりのような方を避難させる場合には、やはりその家庭ではどうにもなりませんのでどうしても公的な力が必要になってきます。私の場合は、消防本部のご理解があって救急車を出動し、サイレンを鳴らさないで搬送をしてもらったという経過がございました。それで避難したまではいいんですが、洪水が終わって帰る段階になると、「連れてきたんだから送って帰れ」という方がおまして、これには困りました。南町の町会さんには「何とかお前からやれよ」ということで、結果はよく存じ上げていませんが、避難はなかなか難しいなということです。



そして福島の場合は勿論どこも同じですけど、災害経験があまりなかったものだから、行政も我々も、避難とか或いはそういう方法がなかなかスムーズにできなかったことなど、反省する点はいっぱいあります。今度だんだんこういうものに慣れてい

くということは、あまりよろしいことではないですが、やはり2、3回経験しますともう少しスムーズな活動もできたのではないかと考えております。

金子 先ほど述べました、店と住まいが別なものですから、水が入る状況が全然記憶にないんですよ。危機感は全然感じなくて来て驚いた、水が入っていてびっくりした、私の水害の記憶はその程度なんです。だから無責任なようだけれども、みんな住んでいる人達は大変だったでしょう。水が入ってきた時は、私は店にいなかったの、入った後の状態だけが記憶にあります。

座長 近所の方の状況は。

金子 近所の方はみんな住んでいますから。でもうちが一番あの辺では上まで水が入ったんです。ちょうど低い所にあったから。普通は床上やはり1m位はみんな入ったんですけども、私の店の場合には、そばで錦鯉のすごいのがいっぱい泳いでいました。

佐藤 金子さんの所は排水の樋管がある所ですから一番低いんです。恐らく家には入れなかったでしょう。

金子 はい、店には1階から入れないので、やっと2階に上がって、2階の窓から入って初めて中の状況が分かったんです。

まだ堤防が決壊しない最初のうちは、みんながうちの店に来て見て「うわー入ったね、入ったね」と言っていました。その後ですよ、決壊してみんなぜんぶ商店街一面が水浸しになっちゃったのは。

佐藤 パラペットの越流している所は恐らく金子さんの脇のパラペットです。

金子 あふれ出るようにパラペットを越流したから、すーっと水がだんだん増して行って、全部家具からテーブルから、冷蔵庫から浮いていき、その後は周りが全部水浸

しになっていきました。

座長 ありがとうございます。先ほど降矢さんから、破堤の後の排水に時間がかかったというお話がありましたが、水防活動をする上での機材などの面で、当時の様子や難しかった面などについてお話いただきたいと思います。最初に降矢さんから排水活動の関係をお話し頂いて、それ以降はどなたか続けてご発言頂ければと思います。

降矢 現実に見たのが自分の地区である、水門町管内と工業団地だったんですが、100%自衛隊と警察です。工業団地なんかは殆ど仕事だったので、皆さっきも言ったように認識がなくなったところに水が入って、一番早かったのは工業団地の大河原という、先ほど話をしました旧河川です。殆どがボートで救出され、それで最後の方が1人、2人いたんですが、1人は救出された後に亡くなり、もう一人は見つけられなくなって、それで工業団地で2人亡くなっているんです。2人の方も最初は2、3人でいたみたいですが、いつの間にかボートで避難させた時に後ろを見たらいなかったという状況でした。水門町の避難は全員で、さっきも出ましたように災害対策本部が何もなくて、警察が最初に来たんですよ、危ないということで。それからのスタートなものですから、殆どもう100%水に浸かっている、さっきも話したように最終的には約300世帯のうち、1世帯だけが浸水しなかったの、殆どが工業団地と同じように低いために、ボートの対応しかなくて、消防のボートを含めて100%の避難者の救助ができた。あと排水のため谷田川の堤防をきるための県の了解が1日かかったんです。その後それまでかなり水が溜まっていたので、その排水も、これは消防の方で専門

にやって、2日位かかっています。ですから消防以外とか、一般の方とか町会の方々というような状態ではありませんでした。工業団地を含めて。

座長 他の方でいかがですか。洪水の後に復旧にかかる過程の排水活動での課題などがあればお話し下さい。

渡辺 南町も4mよりも多い内水面だったので、ポンプ車2台による排水をしたわけです。規模が小さいのでなかなか排水は容易ではなく、約2日位かかったと思います。それでもまだまだ水が引けない。一般住民の方は、いつまでも水に家を浸けておくと、財産が全部駄目になっちゃうということで、大変いきり立っていましたけれども。その後、国で排水車を充実していただきましたけれども、当時はポンプ車で、小さい動力でもって排水せざるを得なかったということです。そういうわけでこの南町も家財道具全部を、排水終わってから道路に出して色々掃除が始まったんですが、その臭いやら何やら大変なことから、市役所さんの方に臨時派出所を作ってもらって、被害者皆



様の手助けを市の方にもお願いをしたという経過がございます。

座長 ありがとうございます。ここまで当時の状況について、皆様のご経験をお話しして頂きましたが、中沢さんからも当時の状況で補足することはありますか。

中沢 冒頭申し上げた通り、とんでもない

事態になったなというのが正直なところで、この洪水の前は、実は阿武隈川は渇水で、渇水対策会議をやらなくちゃいけないかなと言っていたところで降り始めた雨なんです。最初は台風から変わった温帯低気圧ということで、台風よりは楽なのかなと思っていたんですが、ちょうどその前線が栃木と福島の間あたりで停滞したために、このような大雨になったわけなんです。当時私の担当は洪水予警報と水防警報の発表で、それが一番の役目だったんですが、4日の午後10時には須賀川で当時の指定水位を超えて、次の日の2時には警戒水位、今という氾濫注意水位を超えました。下流の各観測所でも、3時間の間で矢継ぎ早に基準水位を超えたということで、実際のところははてんてこまいの状況でした。

こういった中で、当時と今を比べてみると、情報発信という面では、一つは国交省の観測体制、水位の状況を掴んで皆さんにお知らせするという意味では、今は観測機器の向上と二重化されています。今日お見えになっている方がいるかと思いますが、当時須賀川では無堤だったために、水位を計る量水標が足りないんです。地面の上立っているだけです。このために観測員の方は、土手の所に仮の量水標を立ててそれで水位を測定して通報してくれるという、そんな時代でした。

またちょっと観点は変わりますが、今日もお持ちしていますが、(阿武隈川洪水写真集)この時は茨城県の小貝川も破堤しているんです。当時のマスコミは、そちらの報道ばかりで、もう卒業したので話してもいいと思いますが、当時国交省の本省では、なかなか東北の状況を全部把握しておらず、当時の事務所の人が、役場やら事業所、た

ぶん今日お見えになっている方々の所にお邪魔して、写真のネガを借りて、それをその場で焼いて、それをすぐ印刷製本して本省に届けたら、阿武隈川はこんなに酷い事になっているのかというようなことで、やっと本省も気がついてくれたと言う事も聞きました。また表現はおかしいのですが、今日もマスコミさんが来ているので褒めたいと思うんですが、最近ではテレビ局の方々が逐次現地の状況とか報告してくれて、全国津々浦々にそういった被害の状況とか分かるようになっており、良い事と思っております。

また、これも後から話したいと思うんですが、自分の所は災害が来ないんじゃないかと、災害の悲惨さというのはなかなか身をもって体験しないと感ぜてもらえないという意味では、水防団の方々、また行政の防災担当をしている方は非常にじれったい点があるのかなと常々感じておまして、こういった座談会を通じて、またいろんな面でその悲惨さ、重大さ、また重要さ、そういったことをアピールできる良い機会です。今日はお招き頂きありがとうございます。

村上 郡山市では、先程、降矢さんからお話がありました中央工業団地ですが、この団地には、97社あります。このうち59社を郡山市が誘致をしたものです。また、隣には郡山の台所である卸市場を含む食品工業団地もあります。

5日は天気良かったんです。天気が良くなったから従業員の皆さんが出勤し操業を始めたのです。しかし阿武隈川の水位がどんどん上がってきていましたが、皆、堤防が切れたりする状況になっているとは思ってはいなく、通常の作業をしていたのです。結果、工場だけで当時、387億の被害

を受けたということになりました。

降矢 そうですね。そういう状況で仕事やっているとところに水が来たという感じなので、現実はね。それでちょうど低い所なんです。そこに谷田川と阿武隈川の旧河川とが決壊したのでどちらにも水が来て、この大河原というのは一番近い所なんです。

中沢 写真集で思い出したんですけども、当時の本宮町役場では、床上浸水で机の上で業務をやっているんです。加えて、いろんな情報が錯綜している中で、本当に水防団の方に情報が伝わったのかなという心配があったんですが、後から水防団活動の記録を見てみますと、本当に足元の悪い中、真夜中のそういった中で、沿川では1万人を超えるような水防団の方が活躍しているんです。また先ほど南町の方は独自に自衛隊を動かしたなんていうのは、県を通じてでないとなのかなと思っていただけでも、やはりその場の判断というのは素晴らしいものがあつたのかなと感じました。

座長 ありがとうございます。次に、当時の状況を踏まえて、今後の対策のあり方に話を移していきたいと思えます。

それでは話を移す前に、事務局から資料の説明を少しさせていただきたいと思えます。

事務局 それではまたスクリーンの方をご覧頂きたいと思えます。お手元にお配りしております資料2も同じものになっておりますので、見づらい場合はそちらをご覧になって頂きたいと思えます。

最近の雨の降り方は、マスコミ等でも局地的集中豪雨、ゲリラ豪雨という言葉が頻りに聞く機会が多くなっておりますけれども、左下につけていますグラフを見て頂き、約30年前と比べまして、1時間当たり50

ミリを超える激しい雨の降り方が、直近 10 年と比べると 1.4 倍に増えてきております。その右側には、今年の線状降水帯、雨の雲が南北に伸びて連なっており、長時間激しい雨を降らせるということも、最近の特徴として増えてきております（図 3）。

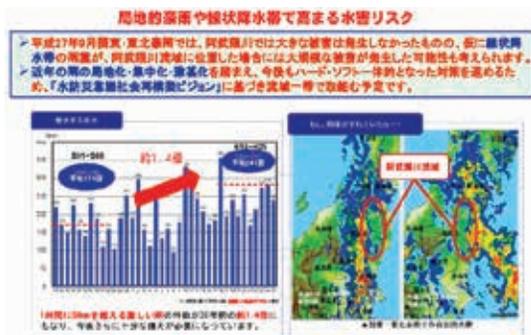


図 3 最近の雨の降り方の特徴

今年の台風の状況ですが、台風そのものの発生はかなり遅かったんですが、8月には福島県、東北地方にも7号から9号、10号、11号と、立て続けに襲来してきております。特に、阿武隈川ではあまり大きな被害は発生しておりませんが、福島市にある支川荒川では避難判断水位を超える洪水となっております。

続きまして、これは資料につけておりませんが、画面を見て頂きまして、今年の8月の台風10号、これは全国のテレビ報道等でもかなり紹介されておりましたが、東北地方の太平洋側から台風が上陸するという、初の事象が起こり、岩手県沿岸で甚大な被害が発生し、特にこの5地区で大きな被害が発生しております。特に岩泉町の小本川のグループホームの被災をはじめ、写真等で見得る通り、甚大な被害が発生したというのが今年の台風10号の状況でした。

続きましてまた資料に戻って頂きますと、最近の雨の降り方としまして、昨年9月の関東・東北豪雨では、線状降水帯により長

時間連続した降雨が発生しております。その際に鬼怒川の破堤、宮城県内の県で管理をしております渋井川で3箇所破堤というような洪水もありました。当時宮城県内の河川で、被災を受けた所を地元の水防団或いは建設業者と連携を取りながら、国交省でも水防活動や対策を一緒に対応しております。また県、市町村へ国交省からリエゾンを派遣して、情報連絡体制を強化・連携して対応を図ったというところを紹介させて頂いております。

続きまして、今年の関東・東北豪雨を踏まえ、新たに水防災意識社会の再構築として、全国的な取り組みをしております。国が管理する全国109水系で、今後5年間で新たに水防災意識社会を再構築するという事で、大きくソフト対策とハード対策の2本を柱にしています。阿武隈川上流につきましても、減災対策協議会として阿武隈川上流の減災に係る取組方針を策定するために、沿川の各市町村の首長さんに集まって頂きまして、協議会を開催しております。今年4月に立ち上げまして、9月26日に2回目の協議会を開催し、その中で今後5年間にどういった取り組みをしていくかというところを話し合っ決めております。

続きまして資料につけておりませんが、ハード対策の手法として、全国的にいざという時に被害を最小限に留めるために、越水してもなかなか破堤しづらい堤防にしようということで、堤防の天端の保護や、堤防法尻を越水しても洗掘されないように補強をしていく対策をしていきます。阿武隈川でもこの堤防の裏法尻の補強などは、今後進めていく予定になっております。今話をしたのは昨年9月の関東豪雨を踏まえての状況ですが、昭和61年8月5日洪水を受

けて2箇所破堤した支川広瀬川の改修を激甚災害対策特別緊急事業により着手し、激特事業・一般改修・激特関連事業により改修を行い、広瀬川については平成7年で改修が概成しております。それ以降の平成10年、これも阿武隈川では大出水に襲われてしまいましたが、その際には「平成の大改修」として、阿武隈川の国管理区間、宮城県境から須賀川市まで、全川に渡って無堤部の解消等を行っております。資料には浜尾遊水地の整備、本宮の特殊堤の整備をしている所の写真をつけております。

そういった整備を随時進めてきてはいますが、未だに堤防の完成堤の整備率としましては、2年前の数値ですが、約63%。平成10年時点と比べますと35%から63%と、1.8倍ほどには増えていますが、まだまだ100%には至っていないという状況であります。昭和61年以降順次整備してきた所を代表の4地区ほど資料をつけております。

続きまして最近のソフト対策の取り組みとしまして、洪水ハザードマップ、国あるいは県で浸水想定区域図、もしどこかで破堤した場合にどこまで浸水域が広がるかというような図面を作成しております。これをもって各市町村さんで、浸水エリアからどこに逃げたらいいのか、避難場所・避難ルート等を記載したハザードマップを作成して、これは阿武隈川いの国管理区間沿いは全市町村で作成をしております。ただしこの当時、平成14年に作った時は、150年に1度降る雨、2日間で256.5ミリの雨で氾濫させた場合の浸水想定区域図を作っておりました。しかし、最近の雨の特徴を踏まえて、約1000分の1の雨で、2日間で323ミリの雨を降らせた場合にならぬかという想定しうる最大規模の洪水で破堤を

させた場合の、浸水想定区域図というものを作成しております。これも今年の6月30日に新たに作成・公表しておりますので、それをもって今後、各市町村においてハザードマップの改訂を順次進めていただくというような取り組みをしております。

続きまして、先ほどから情報伝達という話が出ておりますが、最近は携帯電話、スマートフォンでもすぐ河川水位の情報等が入手できますし、家庭のテレビ、地上デジタル放送でも防災情報を見て頂きますと水位・雨量の情報あるいは今の水防警報発令の状況等もご覧になることができます。あとは車で走っていますと河川沿い、橋梁沿いに情報表示板で、河川の水位状況などを表示しているというようなことや、事務所のホームページでライブカメラも含めて現在の状況をご覧になることができます。



座長 ありがとうございます。今事務局からご説明させていただきました最近の異常気象のような状況、それからハード対策としてどういう形で進めてきたのかというのを一通りご説明させていただきました。先ほど佐藤さんから、水害があったけれどもその後の激特事業で今の旧梁川町があるというようなことも言っていただきましたが、平成の大改修も含めて、我々としてはハード整備をしっかりと、洪水を安全に流すということをまずやっていくというのが

前提としてあると思っています。その上で冒頭ご説明させていただいたように、河川の容量を超える洪水が起こらないとは限らないですし、最近雨の降り方が変わってきているというのもある中で、水防災意識社会の再構築ということで、水害の意識を社会全体で高めていくという取り組みを、国交省としても進めているところでございます。

そういった中で、前半でお話し頂いた30年前の阿武隈川の戦後最大の洪水のご経験のお話を頂きましたが、その辺を踏まえていただいた上で、情報伝達の面の課題とか、自主防災組織など、地域のあり方とかのソフト対策の面でもいいですし、またハード対策の話でも、今後どうしていったらいいかというお話をまた村上さんから順番にお話いただければと思いますので、よろしくお願いたします。

村上 30年前にこのような被害があり、郡山市としても住民の皆様と一緒にいろいろ取り組んできました。その間に平成10年や平成14年にも水害があったわけですが、情報ということから言いますと、やはり洪水を知らせることであると思います。このため、皆様に分かっていただくために洪水ハザードマップや、水が自分のところにどのように動いてくるかがわかる3次元ハザードマップをつくるなど早めの避難に役立つソフト対策もしております。

半鐘というお話がありましたが、やはり、雨が降っていると当然わかりづらいため、今後は、ITを利用して、スマートフォンなどを活用した情報伝達の部分をもっとPRしていくことも大変重要だと思います。

こういう雨が降らない時に住民の皆様が、大雨の時自分たちがどういう行動をすれば

いいのか考えておくことがすごく重要な部分です。やはり、焦ってしまったり、災害に弱い方々もたくさんいらっしゃいますから、そのような方々を安全に避難させるための取り組みとして、あらゆる手段を使って、情報を発信しているところでございます。

ただし、それだけで住民の皆様が安全が確保できませんので、ハード対策も行ってあります。郡山に降った雨は、阿武隈川に流れるのですが、流すことのできる量は決まっているので、貯留をかけていく必要があると考えております。

平成になってからですが、郡山市では、トイレを水洗化する時に浄化槽を取らないで雨水を溜めることに利用する場合には、補助金を出す制度などを郡山市ゲリラ豪雨対策9年プランという形で行っております。また、田んぼダムというのもこれからは必要だというふうに考えてございます。それだけではなく、行政としても市内5箇所の貯留施設を整備しようとしております。

このような形で、河川改修や雨水幹線の整備などのハード対策をしておりますが、やはり重要なのは、先程言いましたとおり、被害を最小限に防ぐためのICTを利用した情報伝達と、日頃の勉強、そういうものが大切であると考えているところでございます。

降矢 町会としての対応を説明させていただきたいと思います。まず8.5水害を受けて、水門町独自の緊急避難を含んだ要綱を策定しました。町会長をキャップに、副会長を現場のブロック責任者にして、その下に組長をつけて、そういう組織を作って、この前の平成23年の台風の時は、集会場にインターネットを備えつけて、それで安原の水位管理をして対応した事実があります。

本当に須賀川の浜尾遊水地には、郡山の特に水門町の人は大変お世話になって助かっております。また整備拡張も検討しているとお話がありましたので、安原地区では平成 23 年の水位が一番上がっていたはずなんですが、遊水地のおかげで堤防で十分対応できましたので、それが 8.5 水害のままでしたら多分また堤防が決壊していたと思います。平成の大改修のおかげで阿武隈川を整備していただいたので、平成 23 年の水害は除かれたと思われま

す。あともう一つは、県立のテクノアカデミーという元の郡山訓練校、ここと協定を結んで、特に高齢者、70 歳以上が約 290 人町内におります。一人暮らしの 70 歳以上も 17 世帯。これらの災害があった場合の援助、車を含めて避難場所に搬送してくれるような協定を結んでおります。ただ、青雲寮に住んでいる方々がだんだん少なくなっておりますので、今は町内の若手クラスに組織を作るようお願いをしております。当時は平成 23 年を含めて本当にテクノアカデミーの宿泊している青雲寮の自治会長さんにご協力を頂いて、避難対策をした経過がございます。

また国土交通省にお礼ですが、阿武隈川に 3 段階の水位表示をつけていただいたのも本当に助かっております。すぐ看板もつきましたので、雨なんか降ればいつも通る町民を含めてその水位が確認できるものですから、それを見て逆にこういう状態なのでどうでしょうか、という連絡が来るようになってきました。

福島河川国道事務所のご協力で阿武隈川流域防災セミナー、水門町地区の危険な地域、側溝が止まっているとか、そういう箇所を現地調査して、危険箇所のマップを作

って頂きました。それも今、災害時には活用しております。その時に日本大学の高橋教授から講演も頂いております。総合防災機構の役員。そういう経過で今のところ進めております。特に町内に組織を作ったのは大変助かっております。自治防災もあるのですが、まず地元を固めないといけないということで、今作って必ずある程度の時間になれば集会場に集合して、インターネットの情報を見ながら指示を出すようにしております。

渡辺 大災害後、国土交通省に南町に大型な排水機場の設備を作ってもらいましたので、120m³/min という大変大きな水を排水するものですから、それ以来南町もその機械に頼りきりで、あの機械が動く限りは内水面の被害はないのではないかなというふうに思っております。やはり人的被害が一番なので、人が上手に避難をしてもらうために、福島市も避難所を各所に設けておりますが、たまたま南町という所は、地理上、市で設けた避難所 2 箇所とも地元の人は理解をしていません。私は勝手に水害がある地域に避難してもらうような変な形になっていると思っておりますが、やはり避難所を上手に作ってもらうというか、利用するためには、役所も一考していただきたいなという思いがあります。正式には青少年会館という黒岩にある所を指定されているわけです。ところが南町からそこまで行くのには距離もありますし、中小河川を 2 本も渡るようなこともありますし、私も過去の経験で避難した人は自分の地域が見える所に避難するのが一番安心しているんです。川向かいに清明小学校という所がありまして、そこに避難をお願いするんですが、清明小学校も床に被害が出るんですが学校は 2

階・3階がありますから上は大丈夫なので
す。しかし、市としては水が来る所になん
で避難させるんだという声もあって、その
辺がなかなかジレンマな地域です。

国分 今、渡辺さんから話がありました
が、排水ポンプ、実は本宮にもつけてい
ただきました。私は水防団活動をする中
で、本宮にあの8.5水害は何だったの
かなと思うぐらい内水排除、この素晴
らしいものがあります。すごい安堵感
がありました。やはり市街地等で内水に
困る所はそういうものを見つけながら
行くのがベストかなと思っています。伝
達方法ですが、本宮市については全家
庭、全戸に防災行政無線というもの
がついております。電気が通らなけれ
ば電池で動く、受信できるという無線
がついております。水防団等については
、防災行政無線、移動型のものがあり
ますので、連絡がとれる状況です。そ
の防災行政無線があるということは、
連絡漏れがまずないだろうと。それ
がやはり必要なんじゃないかなと思
っております。

もう一つ、震災後いろんなことを言
いましたが、自助・共助・公助という
ことがありました。自助・共助の中で
、私は地域に小さい自主防災組織、そ
の地域でここが一番危ないんだよと
いうのを身近に分かる人達がそうい
うものを作って、しっかり組織を作
れば、万が一の場合でも安心できる
ような感じを持っています。それが今
後の防災の中では一番必要なこと
かなと思います。

本宮市消防団の話ですが、実は県内
で唯一一定数割れない消防団であり
ます。どうしてそうなんだという言
い方をされますが、いろんな地域と
のつながり、団員同士のつながり、
縦横のつながりがありますので、充
足率がいいのかなと思っています。ご



じのように本宮市は旧白沢村、本宮町
が合併したわけですが、旧白沢村に
ついては、各戸の長男については短
いスパン、5年ぐらいで必ず消防団
をやるんだと、地域で決めておる
そうです。ということは、本宮町に
ついては一度消防団に入ってしまう
ば、何年やったら終われるのかなと
いうのがみんな考えるところらしく
て、それとはまた別に5年、この短
いスパンは一生懸命やるんだよと、
長男はやるんだよということで、そ
この地区はやはり定数いっぱいです
。本宮も何とかそういう前後、横の
関係で団員がいっぱいということに
なっています。私は団長を3月で辞
めさせていただきましたが、それま
で新入団員等に辞令を渡す時に、
必ず言っていたことがあります。あ
なたたちは20何歳までこの地域の
、周りの皆さんに育てて頂いたん
だから、見守ってもらったんだから
、成人として今度は消防団に入って
必ず周りの地域の人にボランティア
、恩返しをしなくちゃだめだよと
いうお話を必ずさせていただきます
。やはりそういう気持ちがあればま
とまっていけないのかなと私は思
うので、常々そういう話をさせて
頂きました。

金子 私は専門的な知識がない
ので話すことがありませんが、この
度ここに参加させてもらって、国
土交通省の皆様の研究、努力、身
をもって感心しました。これからも

国民の皆様を守るべく、よろしくお願ひいたします。

佐藤 それでは情報伝達につきましては先ほど防災無線が設置されておりますから、やはり訓練ですね。実はこのお話があった時に市の建設部に行って、いろいろ後輩の皆さんとお話をしたら、90%の人が経験ないんです。職員が30年過ぎた故に、8.5水害を経験した人は10%位残り残っていない。彼らが言うには、見よう見まねでやっていますと言うけれども、絶対の自信がありませんという声が出ていませんでした。通常の訓練を重ねるべきだろうと思いました。お陰様で梁川町は激特事業、関連事業で見違えるように復旧概成しました。本堤については、外水の脅威は全くありません。五十沢もお陰様で万全になりました。そして内水関係は、実は昨日市の担当の係の方から聞いたら、平成31年には農林省の冠水防除事業で完成になりますと聞きましたので、梁川町の内水は一応そこで100%お願いする部分は完成するだろうということですから、安心して水害の時に堤防に行って眺めるだけということなのが、一番心配なんです。防災組織は災害の時は4地区ぐらいしかなかったんですが、あれから防災を見直して、そして自主防災会が今33ありますから、十分各機関に1町内ごとに、全部に防災組織があります。

先ほどお話でも言ったように、いつ頃に水をかくかというのは、自主防災会に任せではどうでしょうか。これからの防災伝達ですが、国と市、町との連絡はテレビカメラでいつでも自由に見られるわけですから。実務担当者はだいたいの手当てはできるのではないかなと私は思っております。テレビで見れば分かるわけですから、内水のう



ちの梁川の場合は、1箇所だけ国の排水ポンプ10m³/sあります。あれは福島河川国道事務所からの命令がなければ動かないんです、委託業者ですから。今後は対策本部を設置した場合に、市対策本部長からも、ポンプ運転命令が出せるよう協議を整えておくことが大事であると思います。旧梁川町の広瀬川合流点の本堤防概成高は海拔46.581mですので、8.5水害外水位1.5mの余裕があります。今後の旧梁川町の防災訓練は排水ポンプの適切な運転技術を高めることにあると思います。

今日までの旧梁川町の本堤は、平成の大改修で概成し素晴らしく立派になりまして、あれは皆さんもご存じない方もあるでしょうけども、ちゃんとドレンになっていますから、全部中にちゃんと洗掘されない護岸が入っています。それをコンクリートでは風情がないので、環境を大事にしてもう一回土羽を打って芝で作られている。中には立派な、絶対洗掘されない、崩れない工事をしてありますので、8.5水害を上まわる洪水があっても、決壊することはないものと信じております。今後の伊達市旧梁川町の排水ポンプ操作指導をよろしくお願ひ申し上げます。

中沢 佐藤さんから阿武隈川は安全ですと言われましたが、私からはなかなか話しづらいのですが、まずハードの面から言い

ますと、先ほど所長の話もあったように、平成の大改修やら激特事業をやっていますが、まだまだ十分な状況でないと思っています。そういう意味では、今後まだまだ流域の安全・安心のために、治水事業の促進をお願いしたいと思っています。

近年では異常気象による局地的な大雨、先ほども紹介ありましたが、つい最近でも8月末岩手で起きた、20人を超える死者を出すような災害が起きているという現状があって、阿武隈川においてもいつ何時このような事態があるかということは忘れていけないと思っています。よく災害については、災害は忘れた「頃」にやって来ると言われていますが、私は災害は忘れた「ところ」にやって来ると。つまり特に今は、先ほど言ったようにいつ何時ああいう雨に襲われるかどうか分からない、常に危機意識を持っておくことが必要と思っています。つまりは、ハードの公助だけに頼るのではなくて、これは洪水に限らず崖崩れや地滑りやら土石流にも同じことが言えると思うのですが、やはり日頃地域の方が常々こういう危機感を持っておくことが重要だと思ってますし、またこういう事態が起きそうな時には、ちゃんと自分の体は自分で守るといったようなことが重要かと思っています。これも先ほどスライドで紹介がありましたが、インターネットやらテレビでも情報は取れます。またハザードマップとかで、先ほど南町の方では避難所についてはまだ課題が残っているというような話があったんですが、いざという時にどういう行動をとらなくちゃいけないのかということは、普段からやはり行政あるいは先ほどから出てます自主防災会の活動の中で、そういったことを常に言う必要がある、そう

いうことが大事なのかなと思っています。

また自助・公助と言えども共助、ちょっと括りが大きくなりますが、例えば水防団の方々ですが、前にも述べましたように、本当に危ない中、被害軽減のために危険を顧みず、これまでも十分な成果を上げていただきました。水防団イコール消防団では、毎年団員の確保という中で非常に苦労されているという話もよく聞きます。普段ではやはり地域のオピニオンリーダーといいですか、何かといえば消防団の方々、また自主防災会の中核を担っている方というのはまさに消防団の方々だと思っています。これからは人員不足が続くと思うんですが、今後もますます活躍していただければと常々思っているところでおり、私がお願いするのはお門違いですけど、よろしく願いしたいと思います。

座長 ありがとうございます。先ほど渡辺さんから避難場所のお話とか、消防団の話だと、地域のつながりの中で消防団を位置づけられていてということで組織率が高いというようなお話は非常にヒントになるのかなと思いました。本宮の方では全戸防災無線が入っていたり、郡山でもICTを活用したり、事務所でもテレビで水位が見られるようにしているなど、いろいろ情報伝達の手法は充実してきているところですが、それに基づいて皆さんがちゃんと逃げただけなのかというところが、最後は残ってくると思っています。最後に逃げて頂くための取り組みについて、ご発言をいただくとありがたいと思っております。

村上 実は、ハザードマップの説明会をいろいろな地域でやってきたのですが、最初の説明の時に住民の方から、「お前の説明は、今まで聞いてきた中で最低最悪の説明だ」

と言われたことがありました。それはどうしてかという、行政は、私たちを助けるために税金を使っているのに、逃げろとはどういうことなんだ。「生命、財産だって同じなんだから、それを逃げろってどういうことなんだ」「逃げないようにするのが行政だろう」って言われ、ものすごい陰悪ムードになった時に、当時、白河から郡山へ雨で避難している人が、「先ほど言ったあの担当者が正しいんだ」と言ったんです。「一旦水が来たら絶対逃げられない。そんなに逃げろということは簡単にできるもんじゃないんだぞ。」という話の方がから出て、今までカーッと来ていた人がシュンとなって、話を真剣に聞くようになったことがありました。ですから、行政は、いろいろと情報提供とかやりますけども、やはり住民の皆さんの中で、こういう経験談をすることが一番重要なのかなと思います。今回のこのような座談会も、経験した人の声で発信をするというのは、すごく効果があると感じます。参考にならないかもしれませんが、そのようなことを感じたところでございます。

渡辺 逃げていただくというのは、大変難しいんですよ。私が経験した南町の被害で、本当に水が上がる前に逃げた人はおそらく2割位いらっしやったのかなと思っていますが、あとの方は殆ど家にいました。それで公的に助けを求めると、そういう行動に出るのが我々普通の人間なのかなというふうに思っていますが、上手に逃げてもらうのにはいかがしたらいいんでしょう。

座長 国分さん、もしよろしければ。

国分 私は先ほども言いましたが、やはり自主防災組織、各地に根づいた自主防災組織が一番大切じゃないんじゃないかなろうかと

いうふうに考えます。

降矢 郡山については全市、旧市町村を含めた合併全域で、学校単位に自主防災訓練、各地区に町内単位に自主防災訓練を毎年続けております。そこから何名くらいずつを動員して1日ばかりで、雨の日もやるんですよ。今年は雨だったんですが、それを毎年実地訓練しております。うちの方でいえば芳賀地区の会場の時は、地区の各町会の自治防災の委員が全員出動です。それで訓練は消防、自衛隊、あと業者が参加します。業者というのは関連する納品業者です。例えば消火器の会社とか、あるいは災害の時の炊き出しやりますよね。そういう所の担当とか、あとは病院を含めて、年1回ずつ持ち回りでやっております。

座長 ありがとうございます。

佐藤 自主防災会が今、伊達市の場合は、旧梁川町には十分あるということを申し上げましたけども、やはり防災には公助・共助・自助があると言いますが、住民の方の心だと思うんですよ。例を申し上げますと、先ほど船場の堤防が決壊した地区の自主防災会は、常備の排水ポンプ(0.35 m³/s)を自ら運転します。そして防災参加者、消防団に炊出ししております。地区の皆様方が防災に心を一つにした共助の姿があります。

消防団の防災活動中の後方支援で大事なものは、婦人会の炊き出しであります。食事はやはりおにぎりじゃないと駄目なんです。力が出ないんです。それは前の洪水災害でお湯入れて絞り出す非常食を出したことがあるんですが、こんなものでは稼げない、力が入らないとお叱りを受け、次の平成10年の時に、今度はあったかいおにぎりに、たくあんを添えて、しょっぱい味噌漬を添えて炊き出しましたら、今度は上等

だ。力出る、倍出るぞ。と褒められました。皆さん土のう積みの辛さっていうのはすごいんですよ。休めないですから、始まったら。へトへトになるまでやるんです。その時に一番大事なのが食べ物、婦人会の炊き出しおにぎりであるというエピソード一つだけ申し上げます。

今伊達市では防災対策本部が設置されると、各自治会の自主防災会がある地域に見廻り、点検報告をしっかりと行っております。公助と共助の心が繋がるのも良いことだと思っております。

結びに、「災害は忘れたところにやってくる。」でありますから、日頃の訓練と心がけが大事であると思えます。

座長 大変ありがとうございました。今日は30年前の、戦後最大の洪水の体験談をお話し頂いて、そこから今後どうしていくかというお話まで頂きました。我々河川管理者としては当然ハード整備を進めていくこ



とに加えて、沿川の自治体の方々と情報連絡を密にしていく必要もあります。それから消防団の方との連携とか、地域の方々への情報伝達も、いろんな手段を使って情報を出していくということ、一生懸命やっっていかなければならないです。その前提でさらにそこから地域の方々へどう覚えていただくかというところが、やはり頑張って

いかなきゃいけないところです。今日のお話の中でも自助・共助・公助というお話もありました。そういったところを踏まえて、地域の方々の意識を変えていくことが必要です。水害が起こると個人個人の家もそうですが、工業団地などの経済的な被害も当然大きいわけですから、社会全体として水害に対する水防災意識を持つ必要があります。皆さんから8.5水害を踏まえてとか、平成の大改修で整備が進んできたというお話を頂いたんですが、またそれが水害が身近なものでなくなってしまう、水害リスクが高まっていくことになってしまいます。やはり整備は整備としてやっていくのと合わせて、それでも想定外のことが起こるとい前提で地域の、社会の意識を変えていくところを頑張っていかなければならないと再認識させていただきました。またこういった経験が、最後に佐藤さんから頂いた、心を入れた対応をしていくためには、洪水の経験した方の話を直接聞くことが非常に心を入れるきっかけになると思えますので、ぜひ今日頂いたようなお話をまた地域の中でも皆さんに広めて頂いて、水防意識を高める一助になればと考えておりますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思えます。どうもありがとうございました。

司会 皆様方、大変お疲れ様でございました。ただいまをもちまして、昭和61年8月5日洪水からの30年目の座談会を終了させていただきます。本日、聴講に来られた方も含めて、皆様方からの拍手をもって、お礼に代えさせて頂ければと思えます。誠にありがとうございました。

それではこれにて座談会を終了いたします。

● 参考資料 ●

- ・ 巡回パネル展使用パネル
- ・ パンフレットの見本
- ・ 巡回パネル展アンケート集計
- ・ 新聞報道

参考資料－巡回パネル展使用パネル(抜粋)

はじめに

阿武隈川上流全域で甚大な被害を被った「昭和61年8月5日洪水」から、今年で30年となります。

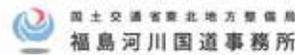
その後も阿武隈川流域では、平成10年、平成14年、平成23年と度重なる洪水に見舞われており、その都度、治水施設の整備を行っておりますが、まだまだ十分とは言えません。

また、昭和61年当時の水害経験者の高齢化や水害を経験していない世代もあり、洪水の恐ろしさが薄れてゆく傾向にあります。

このような背景の中、過去の洪水の記録を風化させず、後世に語り継ぐことが大切であり、かつ、地域住民の防災意識の向上が必要と感じられます。

過去の洪水被害の状況や最近の行政の取り組みを幅広く一般の方々に紹介することで、過去の洪水から水害の恐ろしさを知り・学び、そして地域と一体となって考えていただくため、本巡回展を開催いたします。

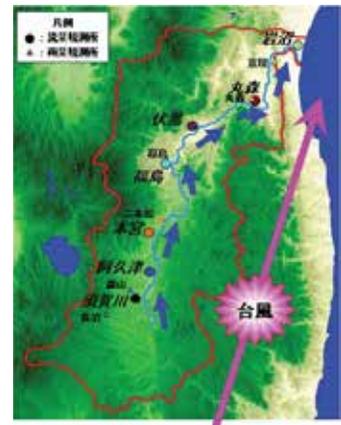
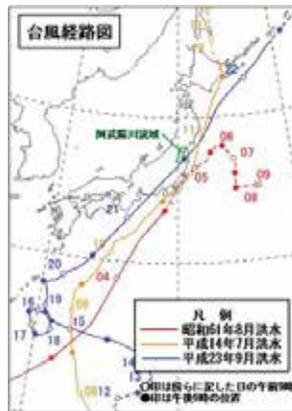
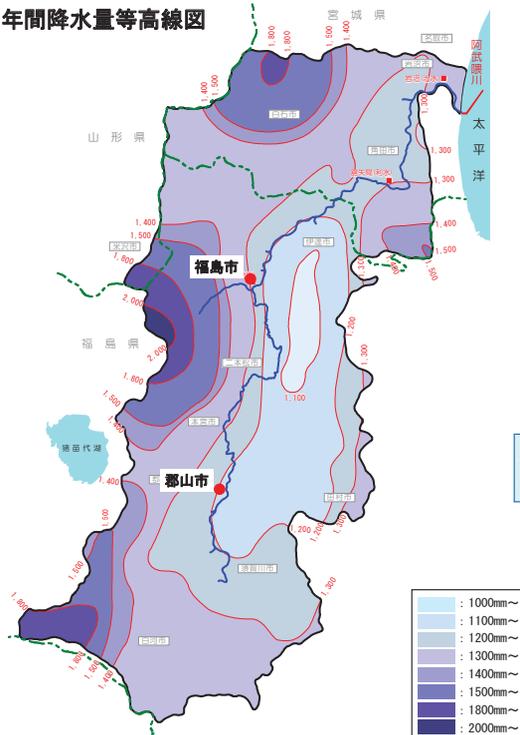
阿武隈川上流大規模氾濫時の減災対策協議会



※阿武隈川上流大規模氾濫時の減災対策協議会は、当時の関東・東北開発庁等の敷設を継ぎ、阿武隈川で発生した大規模洪水に備えるため、国・県・市町村(6市2町2村)で構成される協議会として設立されました。

阿武隈川の特徴(降雨特性)

年間降水量等高線図



阿武隈川の水量 上流<中流<下流 へと増える
そこに台風に伴う豪雨が 上流→中流→下流 へとプラスされ、洪水に

- ▶ 阿武隈川流域の年平均降水量は、奥羽山脈側で約1,500mm、阿武隈山地側で約1,200mm。
- ▶ 阿武隈川の流域・流路は南北方向になっているため、台風の進路と一致しやすい傾向により、主要洪水はほとんどが台風起因する。

阿武隈川における過去の洪水被害①

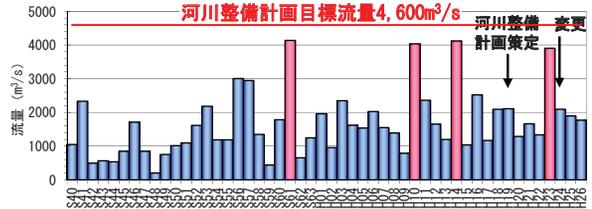
- ▶ 戦後最大の出水を記録した昭和61年8月台風による洪水では甚大な被害(S61洪水から今年で30年が経過)
- ▶ 近年においても、平成10年8月洪水、平成14年7月洪水、平成23年9月洪水により浸水被害が発生

洪水の発生状況

洪水発生年	流域平均2日雨量		実績流量 (m ³ /s) (水位 (m))		被害状況	
	福島	岩沼	福島	岩沼		
昭和13年 9月 1日 (台風)	169.5	164.5	3,320	4,430	床下浸水 2,918戸 床上浸水 1,068戸	全半壊 79戸 死者負傷者 25人 ※1
昭和16年 7月 23日 (台風8号)	240.6	228.0	4,310	5,450	床下浸水16,582戸 床上浸水17,708戸	全半壊208戸 死者負傷者 69人 ※1
昭和22年 9月 15日 (カスリン台風)	181.3	170.6	1,880	3,400	床下床下浸水合計 33,470戸	全半壊209戸 死者負傷者 38人 ※1
昭和23年 9月 17日 (アイオン台風と低気圧)	178.0	181.0	3,780	4,450	床下浸水24,559戸 床上浸水18,834戸	全半壊737戸 死者負傷者 95人 ※1
昭和25年 8月 4日 (台風11号)	126.0	149.2	1,670	3,170	床下浸水17,097戸 床上浸水 8,414戸	全半壊686戸 死者負傷者115人 ※1
昭和33年 9月 19日 (台風21号)	—	157.0	—	(6.72m)	床下浸水29,233戸 床上浸水 9,549戸	全半壊 707戸 死者負傷者 68人 ※1
昭和33年 9月 27日 (台風22号)	143.1	156.7	2,140	4,730		
昭和41年 6月 29日 (台風4号)	148.2	138.7	2,340	3,660	床下浸水 一戸 床上浸水 一戸	全半壊 一戸 死者負傷者 一人 ※2
昭和41年 9月 25日 (台風26号とその温帯低気圧)	141.1	130.1	2,200	3,580	床下浸水 一戸 床上浸水 1,935戸	全半壊338戸 死者負傷者 一人 ※2
昭和46年 9月 1日 (台風23号)	136.6	154.6	1,710	2,920	床下浸水 357戸 床上浸水 37戸	全半壊 1戸 死者負傷者 一人 ※2
昭和56年 8月 23日 (台風15号)	166.7	164.0	3,010	3,910	床下浸水 176戸 床上浸水 24戸	全半壊 一戸 死者負傷者 一人 ※2
昭和57年 9月 13日 (台風18号)	131.4	140.6	2,950	5,730	床下浸水 4,204戸 床上浸水 675戸	全半壊 23戸 死者負傷者 一人 ※2
昭和61年 8月 5日 (台風10号とその温帯低気圧)	233.5	248.2	4,140	7,590	床下浸水11,733戸 床上浸水 8,372戸	全半壊111戸 死者負傷者 4人 ※2
平成元年 8月 7日 (台風13号)	127.2	160.9	1,960	5,240	床下浸水 668戸 床上浸水 412戸	全半壊 16戸 死者負傷者 一人 ※2
平成 3年 9月 19日 (台風18号)	136.1	126.3	2,350	3,170	床下浸水 273戸 床上浸水 79戸	全半壊 1戸 死者負傷者 一人 ※2
平成10年 8月 30日 (伊勢湾台風と台風4号)	215.8	189.5	3,990	5,400	床下浸水 1,713戸 床上浸水 1,877戸	全半壊 69戸 死者負傷者 20人 ※2
平成14年 7月 11日 (台風6号)	220.9	220.6	4,120	6,690	床下浸水 886戸 床上浸水 605戸	全半壊 一戸 死者負傷者 一人 ※2
平成23年 9月 20日 (台風15号)	218.4	214.6	3,760	4,500	床下浸水 873戸 床上浸水 1,663戸	全半壊 一戸 死者負傷者 一人 ※3

出典：※1.東北に影響を及ぼした台風、※2.水害統計、※3.洪水後の調査より整理

福島基準地点の年最大流量



●昭和61年8月洪水の被害状況



家屋の浸水被害が発生した (伊達市)



谷田川合流点の浸水状況 (郡山市)

●平成10年8月洪水の被害状況



河岸前縁の拡大を防ぐシート張り (福島市)



水位の上昇に不安を浮かべる住民 (本宮町)

阿武隈川における過去の洪水被害②

- ▶ 明治43年や大正2年洪水で甚大な被害が発生。これらの洪水を契機に大正8年、**国直轄で河川改修に着手**。
- ▶ 昭和33年9月や昭和41年6月洪水等による被害や流域内の開発状況等を考慮し、昭和49年に**工事実施基本計画を策定**。
- ▶ **昭和61年8月に戦後最大規模の洪水発生**、平成10年8月、平成14年7月と立て続けに大規模洪水が発生。
- ▶ 河川法の改正により、平成16年1月に**河川整備基本方針策定**。平成19年3月に**河川整備計画策定**。
- ▶ 平成23年3月11日の東北地方太平洋沖地震とそれに伴う津波により河口部を中心に甚大な被害が発生するとともに、広域的な地盤沈下が発生。このため、河川整備基本方針と河川整備計画を**平成24年11月に変更**。

大正2年8月洪水の被害状況
家屋の浸水被害が発生した (福島県本宮市)

昭和6年7月洪水の被害状況
岩沼実績流量:5,450m³/s
福島実績流量:4,310m³/s
家屋の浸水被害が発生した (福島県本宮市)

昭和33年9月洪水の被害状況
岩沼実績流量:4,730m³/s
福島実績流量:2,140m³/s
(宮城県丸森町)

昭和41年9月洪水の被害状況
岩沼実績流量:3,580m³/s
福島実績流量:2,200m³/s
国道115号が浸水した (福島県福島市)

昭和61年8月洪水の被害状況
浸水面積:14,630ha
岩沼実績流量:7,590m³/s
福島実績流量:4,140m³/s
家屋の浸水被害が発生した (宮城県岩沼市)

平成10年8月洪水の被害状況
浸水面積:1,840ha
・外水:1,227ha
・内水:613ha
岩沼実績流量:5,400m³/s
福島実績流量:3,990m³/s
河岸前縁の拡大を防ぐシート張り (福島県福島市)

平成14年7月洪水の被害状況
浸水面積:959ha
・外水:472ha
・内水:487ha
岩沼実績流量:6,690m³/s
福島実績流量:4,120m³/s
水位の上昇に不安を浮かべる住民 (福島県本宮市)

平成23年3月東北地方太平洋沖地震
阿武隈川の右岸に位置する岩沼市及び理町では、死者・行方不明者61名。全壊・半壊の建物被害は、両市の全世帯数の2割程度
津波によって崩壊した堤防 (阿武隈川右岸0.1k付近・理町荒浜地先)

平成23年9月洪水の被害状況
浸水面積:1,210ha
・外水:589ha
・内水:621ha
岩沼実績流量:4,500m³/s
福島実績流量:3,760m³/s
家屋及び農地浸水被害が発生した (福島県郡山市)

計画高水流量5,800m³/s(福島)、9,200m³/s(岩沼)

ハード対策の取り組み(洪水と戦う治水施設)①

i) 激特事業や平成の大改修などによる再度災害防止対策

- ・ 昭和61年洪水で被害を受けた広瀬川では**再度災害防止**を目的とした**激特事業**を実施しました。

ii) 阿武隈川河川整備計画に基づく予防的治水対策

- ・ その後も、平成10年洪水において、約3,659戸の浸水、死傷者20名の被害が発生したことを受け、「**平成の大改修**」と命名し、**無堤部の築堤や浜尾遊水地の整備等**を重点的に実施しました。
- ・ 現在も、平成19年に策定された**河川整備計画**に基づき、策定から概ね30年後にS61.8洪水と同規模の洪水に対して床上浸水被害の防止を目標に、築堤や遊水地等の**予防的治水対策**を進めています。

現在、実施中の事業

▶ H10年洪水を契機に事業着手



▲ 浜尾遊水地(須賀川市)
現在、追加掘削を継続中

▶ 平成14年洪水の様子



▲ 本宮地区築堤(本宮市)
堤防天端まで水位上昇

▶ 平成26年 堤防完成(一部)



堤防の嵩上げを実施

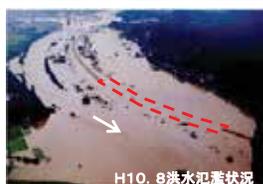
事業実施による効果



▲ 河川整備計画前後の浸水世帯数

ハード対策の取り組み(洪水と戦う治水施設)②

1. 五十沢地区(伊達市(旧梁川町))



H10. 8洪水氾濫状況



堤防完成状況

整備効果等

- ・ 約800mの堤防整備をすることにより、伊達市五十沢地区の浸水被害を解消。

2. 本宮地区



S61. 8洪水氾濫状況



堤防完成状況

整備効果等

- ・ 約1,500mの堤防整備をすることにより、本宮右岸地区の浸水被害を解消。ショッピングセンターの進出や市街地化が進む。

3. 郡山地区(愛宕川排水機場)



H10. 8洪水浸水状況



H11. 6洪水時ポンプ稼働状況

整備効果等

- ・ 毎秒6.0m³の排水機場を整備することにより、郡山市久保田地区の内水被害の軽減を図る。

4 須賀川地区(釈迦堂川合流点)



H10. 8洪水氾濫状況



堤防完成状況

整備効果等

- ・ 左右岸で約2,000mの堤防整備をすることにより、須賀川市江持地区等の浸水被害を解消。

ソフト対策の取り組み(河川の巡視・点検等)

○洪水時の被害軽減のため、関連機関と連携し、水防活動への支援強化、訓練等を通じ、災害に備えています。
○水防団等と河川管理者間で、「河川水位状況」や「資機材の保有状況」等の情報共有を進める必要がある。

重要水防箇所等の合同点検

毎年出水期前に、関係機関等と合同で、重要水防箇所の巡視や水防備蓄資材の点検を実施しながら意見交換を行い、災害の発生に備えています。



合同点検の状況



土のう袋やシート等の備蓄材

水防資材の備蓄状況の点検

職員による徒歩の堤防点検

大雨による洪水に備え、職員による徒歩の堤防点検を実施しています。

徒歩による堤防点検のイメージ(1班:5名で編成)



徒歩による堤防点検状況

洪水予報・水防連絡会

水害の防止、軽減を図るため、水害に関する連絡・調整を関係機関と行い、連携を強化しています。



総会の状況(平成27年4月)

洪水対応演習の実施

出水時に備え、阿武隈川流域の沿川市町村、県、防災エキスパート、国などが参加し、洪水が発生した際の情報伝達訓練を行っています。



洪水対応演習の状況(平成27年5月)

災害に備えた水防訓練の実施

洪水災害が起きた際には、円滑な水防活動が出来るよう、日常から洪水時の役割の確認や水防工法訓練を実施しています。



水防技術講習会の状況

ソフト対策の取り組み(洪水ハザードマップ)

○阿武隈川等で堤防が決壊した際の氾濫状況を時間を継続して変化させ、シミュレーションした結果を福島河川国道事務所ホームページにて公表しています。

浸水想定区域図(阿武隈川):平成14年4月30日公表

<http://www.thr.mlit.go.jp/fukushima/sinsui/index.htm>



シミュレーション条件
・降雨条件:2日で257mmの雨量
・浸水条件:各はん蓋ブロックで堤防決壊により、浸水範囲が最大となる区域を示したもの

洪水ハザードマップ(市町村作成)

市町村長が作成し、住民へ配布



【流域のハザードマップ策定状況】
福島市(H24)、郡山市(H25)、須賀川市(H20)、二本松市(H20)、伊達市(H25)、本宮市(H23)、桑折町(H27)、国見町(H17)、玉川村(H18)
※括弧内の年次は最新の更新年

最近の取り組み(住民等への情報伝達方法)

▶ 河川水位、洪水予報、ライブ映像等の情報を事務所ホームページやテレビ等を通じて伝達しています。

TVによる情報提供

『地デジ』による河川防災情報の提供

河川の水位・雨量がご家庭のテレビで確認できます。

とっても簡単!!

操作手順

- NHK観音にあわせ、リモコンの「チャンネル」を押します。
- NHKトップから「防災・生活情報」を選びます。
- メニューの「河川水位・雨量」を選びます。

地デジによる河川水位・雨量情報 (NHK)

地デジTVでの確認方法

河川情報表示版による情報提供

須賀川市 未来大橋右岸(2面)設置 (H27.7出水時表示)

河川情報板(2面型)

洪水時の河川情報

管内9箇所の河川情報表示板

沿川箇所(計9箇所)

- 福島市(2箇所)
- 二本松市(1箇所)
- 本宮市(3箇所)
- 郡山市(2箇所)
- 須賀川市(1箇所)

沿川箇所の状況(福島市・信夫橋右岸)

平時の河川愛護等啓発情報

事務所ホームページによる情報提供

◆基準観測所のライブカメラ映像

◆基準観測所の水位情報

福島河国事務所HP

臨機な対応の取り組み(災害対策用機械等)

▶ 排水ポンプ車や照明車等の災害対策用機材は平常時から保守点検を行うとともに、機材を扱う職員等の訓練を行うなど、非常時における出動態勢を常に確保しています。

管内 排水設備・災害対策用機械

排水ポンプ車	排水ポンプ車
150 ³ /min 1台 10-4244	30 ³ /min 1台 10-4245
100 ³ /min 2台 10-4251 10-4252	200 ³ /min 2台 10-4253 10-4254
40 ³ /min 1台 10-4255	200 ³ /min 1台 10-4256
緊急連絡車 ヘリコプター 1台 A-0165	主めり造成機 定置式 360 ³ /分 1台 10-4257
	排水ポンプ車 30 ³ /min 1台 10-4258
	照明車 200W (200W×5台) 3台 10-4259 10-4260 10-4261
	防災本部車 広報型 1台 10-4262
	特機支援車 バリエーション 1台 10-4263

排水ポンプ車の設置訓練状況

土嚢造成機の操作訓練状況

※災害に迅速な設置及び機械の正常な稼働を確認することもあわせ、訓練を実施している。

最近の取り組み(水防災意識社会の再構築)

関東・東北豪雨を踏まえ、新たに「水防災意識社会再構築ビジョン」として、全ての直轄河川とその沿川市町村(109水系、730市町村)において、平成32年度目途に水防災意識社会を再構築する取組を行う。

<ソフト対策> 住民が自らリスクを察知し主体的に避難できるよう、より実効性のある「住民目線のソフト対策」へ転換し、平成28年出水期までを目途に重点的に実施。

<ハード対策> 「洪水を安全に流すためのハード対策」に加え、氾濫が発生した場合にも被害を軽減する「危機管理型ハード対策」を導入し、平成32年度を目途に実施。

主な対策

各地域において、河川管理者・都道府県・市町村等からなる協議会等を新たに設置して減災のための目標を共有し、ハード・ソフト対策を一体的・計画的に推進する。

<危機管理型ハード対策>

- 越水等が発生した場合でも決壊までの時間を少しでも引き延ばすよう堤防構造を工夫する対策の推進
いわゆる粘り強い構造の堤防の整備

<被害軽減を図るための堤防構造の工夫(対策例)>

天端のアスファルト等が、越水による侵食から堤体を保護(鳴鶴川水系吉田川、平成27年9月関東・東北豪雨)



<洪水氾濫を未然に防ぐ対策>

- 優先的に整備が必要な区間において、堤防のかさ上げや浸透対策などを実施



<住民目線のソフト対策>

- 住民等の行動につながるリスク情報の周知
 - ・立ち退き避難が必要な家屋倒壊危険区域等の公表
 - ・住民のとるべき行動を分かりやすく示したハザードマップへの改良
 - ・不動産関連事業者への説明会の開催
- 事前の行動計画作成、訓練の促進
 - ・タイムラインの策定
- 避難行動のきっかけとなる情報をリアルタイムで提供
 - ・水位計やライブカメラの設置
 - ・スマホ等によるプッシュ型の洪水予報等の提供

*「H27.12.11 国交省記者発表資料」を一部加筆し作成

※ 河川堤防の決壊に伴う洪水氾濫により、木造家屋の倒壊のおそれがある区域

12

【河川】阿武隈川上流大規模氾濫時の減災対策協議会を開催しました！

平成28年4月28日
福島河川国道

1. 概要

- 阿武隈川上流で発生しうる大規模な浸水被害に備え、隣接する自治体や県、国が連携して、減災のための目標を共有し、対策を一体的かつ計画的に推進するため、4月28日に減災対策協議会を設立しました。
- 今後、「逃がす・防ぐ・取り戻す」ための取組を進め、防災意識向上や被害最小化を図るため、関係機関が5ヶ年で取り組むべき内容を定めた「地域の取組方針」を8月を目途に策定します。

2. 日時／実施状況

- 日時：平成28年4月28日(金)
- 場所：コラッセ福島 4階多目的ホール
- 出席者：伊達市(市長)、国見町(副町長)、桑折町(総務課長)、福島市(市長)、二本松市(市民部長)、大玉村(村長)、本宮市(副市長)、郡山市(市長)、須賀川市(生活課長)、玉川村(村長)、福島気象台(次長)、県(次長)、三春ダム(所長)、摺上川ダム(所長)、福島河川国道事務所(所長)

議事内容

- ・(1)規約及び傍規定の説明
⇒異議なし、協議会設立
- ・(2)～(4)ビジョン、現状の水害リスク、減災目標の説明
⇒一括説明後に意見交換、出席委員からご発言

関係機関 約70名が参加



3. 主な意見・コメント等

- ・今年、S61.8洪水から30年という節目の年であり、甚大な水害を振り返り、教訓を学ぶための様々な取組が重要。
- ・洪水時に頂けるホットラインは大変有り難い。国から頂いたリアルタイム情報を踏まえ、避難判断の材料としたい。
- ・住民に伝える情報は、もっと分かりやすい言葉にする必要。
- ・関東・東北豪雨のような異常降雨に対しては、施設で「防ぐ」よりは、もう「逃げる」しかないと感じた。
- ・住民に対して、的確かつ確実な指示を出すということの必要性、難しさを痛感している。
- ・出水時の防災無線整備などが必要。
- ・阿武隈川の治水は、県人口の半分を占める約130万人もの流域人口の人命に関わるという重要性を認識すべき。
- ・大規模水害時の避難は、一行政区の中で決めることには限界があり、それだけでは収まりきらない。



※昨年12月11日に発表された「水防災意識社会再構築ビジョン」に基づき、全国の直轄河川で協議会の設置を進めています

参考資料ーパンフレットの見本

阿武隈川 戦後最大の洪水を振り返る

— S61.8洪水から30年 —



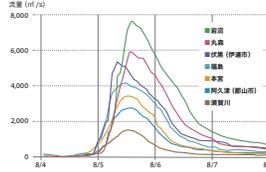
阿武隈川と阿武隈川と阿武隈川の合流地点

国土交通省 国土政策局
福島河川国道事務所

昭和61年8月 阿武隈川での豪雨災害

福島で24時間雨量が264mmに達する戦後最大の豪雨

8月4日、台風10号から変わった温帯低気圧による豪雨は「福島」地点で24時間雨量が264mmにも達し、記録的大雨となりました。このため阿武隈川上流部の水位は4日夕方から急激に上昇しはじめ、戦後最大の洪水となりました。



主要地点の洪水ピークがほぼ同時に発生する阿武隈川の特徴です



阿武隈川の流れは台風の進路と一致しやすいため、たびたび大きな洪水が起きています

戦後最大の洪水による被害の爪痕

床上床下あわせて約1万4千戸の浸水 逢瀬川、谷田川、広瀬川で堤防決壊

福島県内の被害は、約1万4千戸の浸水、56戸の全半壊、死傷者3名となり、県内各地に深い爪痕を残しました。



ボートで救助される住民



広瀬川の堤防が決壊



水面上浮かぶ建物



水深した食品工業団地

水害の防止・軽減に向けた阿武隈川の治水対策

被害を受けて広瀬川の激特事業を開始（平成7年完成）
整備計画を策定し、概ね30年後に浸水家屋ゼロを目指す

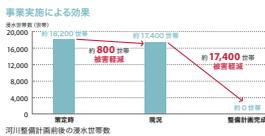
1 激特事業や平成の大改修などによる再度災害防止対策

●昭和61年洪水で被害を受けた広瀬川では再度災害防止を目的とした激特事業を実施しました。

2 阿武隈川河川整備計画に基づく予防治水対策

●その後も、平成10年洪水において、約3,659戸の浸水、死傷者20名の被害が発生したことを受け、「平成の大改修」と呼ばれる当地区の築堤や浜尾遊水地の整備等を重点的に実施しました。

●現在も、平成19年に策定された河川整備計画に基づき、概ね30年後にS61.8洪水と同規模の洪水に対して床上浸水被害の防止を目標に、築堤や遊水地等の予防治水対策を進めています。



現在実施中の事業

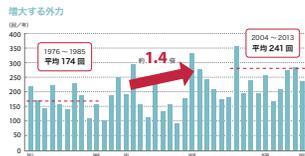
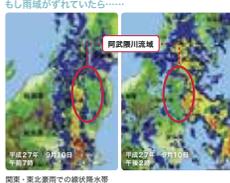


近年の阿武隈川の出水

線状降水帯で高まる水害リスク

●平成27年9月関東・東北豪雨では、大きな被害が発生しなかったものの、仮に線状降水帯の雨が阿武隈川流域に位置した場合には被害が発生した可能性も考えられます。

●近年の雨の局地化・集中化・激甚化を踏まえ、今後もハード・ソフト一体となった対策を進めるため「水防災意識社会再構築ビジョン」に基づき流域一帯で取り組む予定です。



1時間以上50mmを超える強い雨の件数が30年前の約1.4倍にもなり、今後さらに増加が必要になっていきます

コラム

1 広瀬川激甚災害対策特別緊急事業^{※1}

- 梁川町（現伊達市）を流れる広瀬川では2箇所で堤防が決壊、浸水家屋677戸に達する激甚な被害が発生
- このため、再度災害防止を目的とした引堤等の事業が重点的に実施され、平成7年に完成
- 完成後の河川空間は今も地域に親しまれています



改修された堤岸での観のつみどり大会（伊達市）

2 水防災意識社会再構築ビジョン^{※2}

- 平成27年9月関東・東北豪雨では、記録的な大雨により茨城県常総市では鬼怒川の堤防が決壊（左岸21km地点）
- この災害を踏まえ、阿武隈川でも発生しうる大規模災害に備え、「水防災意識社会再構築ビジョン」に基づき協議会を設立
- 協議会では流域の首長を交え、阿武隈川の治水対策について意見交換を実施。今後は8月を目標に取組方針を策定予定



市町村長と治水対策について議論（H28.4.28 コッセ福島）

※1 河川激甚災害対策特別緊急事業
洪水、浸水等により激甚な被害が発生した河川について、改良事業を実施し、再度災害の防止を図るもの。

※2 水防災意識社会再構築ビジョン
国家・東北地方自治体・自治体は呼びかけられて洪水は必ず発生するとの考えに立ち、ハード・ソフト対策を一体的に推進することで洪水に備える社会を目指すために、平成27年11月21日に発表された。（構成員：国、県、市町村、気象庁）

パンフレットの詳しい内容は、ホームページでご覧になれます。

福島河川国道事務所ホームページ
http://www.thr.mlit.go.jp/fukushima/abukuma_gensai/gensai

トップページ 左側にあるバナーをクリック



お問合せ 国土交通省 福島河川国道事務所 調査第一課
〒960-8584 福島県福島市常磐字平36番地
TEL: 024-539-6127 URL: <http://www.thr.mlit.go.jp/fukushima/>

本資料は平成28年4月7日現在の情報を基に作成。 H28.4.8

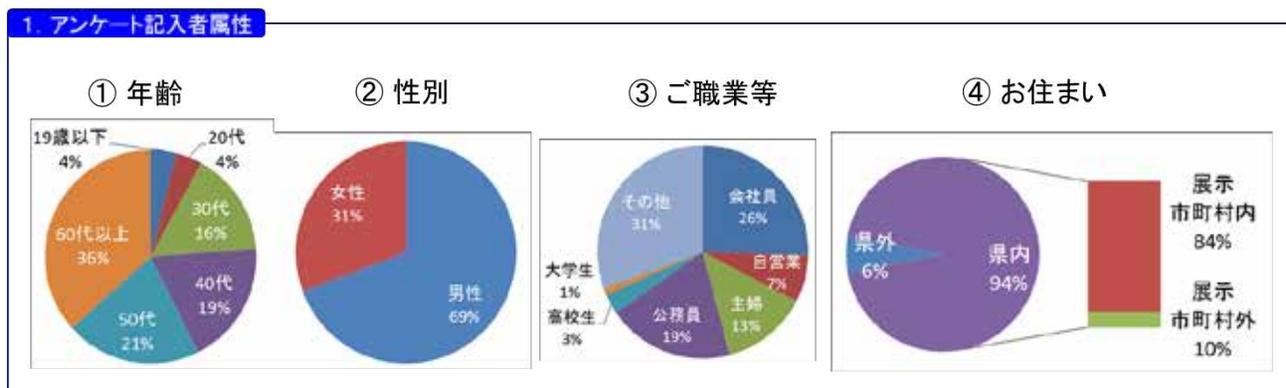
巡回パネル展アンケート集計

巡回パネル展の際に、各会場にアンケートを設置し、来場者からの意見を集めた。各会場ごとの回答数は右のとおりであった。

アンケートでは、記入者の属性のほか、パネル展に関する内容、阿武隈川について知りたい情報について尋ね、自由記入欄も設けた。以下はアンケート集計結果であり、自由記入欄の意見の一部を抜粋した。

会場	回答者数
福島県庁	9
郡山市役所	21
伊達市 保原庁舎	12
本宮市 えぽか	21
福島駅	9
伊達市 梁川庁舎	11
二本松市	1
国見町	4
大玉村	4
桑折町	1
玉川村	7
福島市 こむこむ館	4
須賀川市 中央公民館	3
合計	107

●アンケート集計結果



○年齢

- ・60代以上が4割近くを占めた。
- ・小さな市町村や文化センターや交流施設での開催の場合、60代以上の割合が多かった。
- ・県庁や郡山市役所、伊達市役所、福島駅など規模の大きい庁舎や駅では回答者の若年層の割合が高い。

○職業

- ・「その他」の大半は無職であった。
- ・県庁の回答者の多くは「公務員」であったが、市町村の庁舎では用務で来た地元の人の回答が多い。

○お住まい

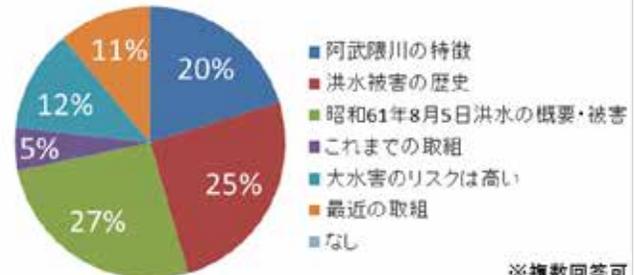
- ・ほとんどの会場で展示市町村内の割合が一番多い。福島駅のみ、県外の回答者割合が多い。

2. アンケート内容

Q1: パネル展はいかがでしたか？



Q2: パネルの内容で何が良かった(興味深かった)ですか？



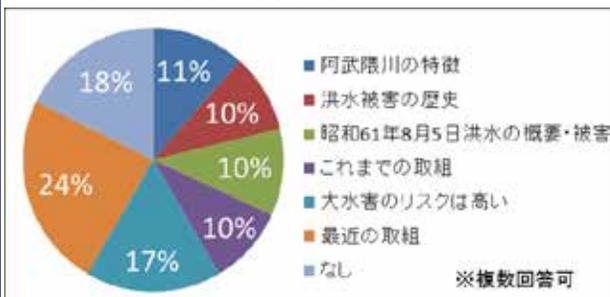
※複数回答可

○Q2 に対する意見

- ・多くの写真や当時の新聞記事によって、当時の被害状況を詳しく知ることが出来ました。ヴィジュアルに訴えるパネル群でした。
- ・水害経験者でも忘れかけていることが多いので、今後の取組を考えたり、相談に協力。
- ・知らない昔のことも知ることができた。
- ・家族の話で聞いていたが、写真を見てその被害の大きさにおどろいた

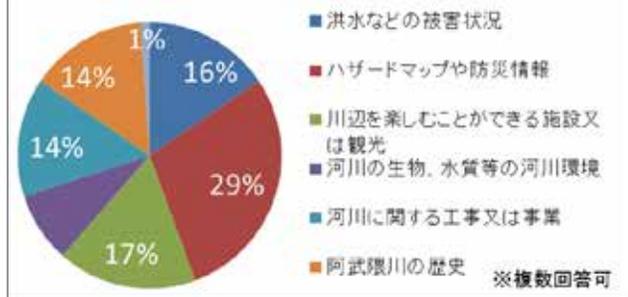
2. アンケート内容

Q3: パネルの内容で工夫や変更したほうがよいものがありますか？



※複数回答可

Q4: 阿武隈川などの河川または防災について、どのような情報を知りたいですか？



※複数回答可

○Q3 に対する意見

- ・映像があるとより理解が深まると感じた
- ・もう少し縮尺の大きい地図でハザードマップを提示しては
- ・公民館前にある水位を見える形で表示するとわかりやすい(建物などに到達浸水深などを示す)。
- ・多くの市民の意見や相談をし、大だけでなく小水害をもとに考えることが重要では？
- ・図解や比較予想図等、少々難解あったように思えます。
- ・もう少し写真やパネルをみたい です

○Q4 に対する意見

- ・河川の流域で形成された文化の共通性など
- ・自分達の住んでいる所の災害リスクを知る機会がこのパネル展で1つのきっかけとなりました。これからの有意義な情報を発信してください。
- ・車イスに乗った家族がいるが私の地区には班がないため、どうやって逃げていいのかわからない。まわりは全部水びたしで出て行く場所までたどり着けるのか不安です。
- ・ソフトの取組も大切であるが、ハード整備が進まなければ根本的に水害は減らすことができないのではないかと。
- ・当時の被害を思い出した。その後の取組を見ることが出来て良かったと思う。
- ・次の世代に語り継ぐために、また開催して欲しい。
- ・「逃がす、防ぐ、取り戻す」は、防災担当者のみならず市民、国民周知徹底が必要！
- ・一般の人にもっとアピールする方法が必要かも

●アンケート集計結果より見えること

○興味深かったパネルについて

- ・「阿武隈川の特徴」、「洪水被害の歴史」、「S61 洪水の概要・被害」への関心が全体の7割近くを占めた。
- ・S61以降に生まれた世代は「洪水被害の歴史」、幼少期に被災した40-50代では「S61 洪水の概要・被害」への関心が最も高い

○工夫した方がよいパネルについて

- ・「最近の取組」に関する事項が一番高い割合を占めた
- ・写真や地図、図表の見せ方(撮影方向や地図の縮尺、写真の大きさなど)やわかりやすい解説に対する意見があがった

○今後、知りたい情報について

- ・全体的には「ハザードマップや防災情報」に高い関心が集まり、年齢が高いほどその傾向が顕著にみられた。
- ・30代以下では水辺を楽しむ施設や観光、河川の環境に対する関心が高かった

新聞記事

プロジェクトチームの取り組みは巡回パネル展や座談会の報道も含め、マスコミに多数取り上げられ、地域住民へ幅広く周知できた（TV放映 6回、新聞掲載 4社11回）。

1:巡回パネル展に関する報道

●福島民友新聞 平成 28 年 7 月 10 日(日) 7面

阿武隈川洪水忘れない 9月まで巡回パネル展

阿武隈川上流で甚大な被害を出した「昭和61年8月5日洪水」の教訓を語り継ぐ巡回パネル展は7日から福島市の県庁で始まった。9月まで県内各地で実施する。福島河川国道事務所の主催。

同洪水では浸水約2万戸、全平壤11戸、死傷者4人の被害を出した。洪水から30年が経過し、記憶を風化させずに県民の防災意識を高めようと企画した。かつての洪水の被害状況、

阿武隈川の地形特徴、治水対策、ハザードマップなどをパネルで展示している。県庁での展示は22日まで。日程次の通り。

▽22日～8月9日 郡山市役所・郡山宮
▽22日～8月17日 伊達市役所・伊達
▽20日～8月9日 伊達市役所・伊達
▽23日 福島駅・福島
▽23日 二本松市市民交流センター
▽8月17日 観月台文化センター・国見
▽8月23日 9月2日 大玉村農村環境改善センター・大玉
▽8月29日 9月7日 桑折町庁舎・桑折
▽9月2日 15日 玉川村就業改善センター・玉川
▽9月7日 30日 11日 須賀川市中央公民館・須賀川

●福島民報 平成 28 年 7 月 8 日(金) 4面

「8・5水害」の巡回パネル展始まる 9月まで県内各地で開催場所と日程は次の通り。

阿武隈川上流全域で甚大な被害があった昭和六十一年の「8・5水害」から今年で三十年となるのに合わせた国土交通省福島河川国道事務所の巡回パネル展は7日、県庁で始まった。9月まで県内各地で開く。

過去の洪水を風化させず、地域住民の防災意識を向上させる目的で企画した。「8・5水害」など阿武隈川の過去の洪水や治水対策を紹介するパネルが並んでいる。

開催場所と日程は次の通り。

▽県庁 7月7日～22日 郡山市役所 12日～29日 えばか(本宮市) 22日～8月9日 伊達市役所 22日～8月17日 JR福島駅東西連絡通路 29日～8月9日 二本松市市民交流センター 8月9日～23日 観月台文化センター(国見町) 8月17日～29日 大玉村農村環境改善センター 8月23日～9月2日 桑折町庁舎 8月29日～9月7日 玉川村就業改善センター 9月7日～15日 須賀川市中央公民館 9月15日～30日

阿武隈川の過去の洪水被害を伝えるパネル展

8.5水害 教訓忘れない



消防団の冊子に目を通す東城さん。「災害の教訓を忘れないで」と訴える

8.5水害 1986(昭和61)年8月4日夜から5日朝にかけての記録的豪雨で河川氾濫や土砂崩れなどが起き、県内で死者3人、浸水約1万4千戸などの被害が出た。梁川町(現伊達市)の広瀬川で堤防が決壊したほか、郡山、須賀川、二本松各市、旧本宮町などでも浸水した。福島河川国道事務所によると、国は広瀬川の被害を河川激甚災害対策特別緊急事業に指定。1995(平成7)年までに広瀬川の川幅を約1.6倍に拡張、堤防を約1.5倍かさ上げした。

県内に甚大な被害をもたらした1986(昭和61)年の「8.5水害」は5日で発生から30年を迎える。昨年の関東・東北豪雨や近年の局地豪雨などに見られるように、水害の危険性は今も変わらないう。災害の教訓を忘れないで。「8.5」を知る関係者は訴える。

30年の節目、振り返る関係者

情報あれば被害抑えられた



堤防整備63%、30年代完了へ

福島河川国道事務所によると、国は8.5水害で記録した24時間雨量264ミリを想定し家屋の浸水を防ぐことを目的とした「阿武隈川水系河川整備計画」を2007(平成19)年に策定。堤防や遊水池の整備のほか、護岸工事に取り組んでいる。昨年3月末時点で堤防の整備率は63%。計画完了は30年代を見込んでいる。同事務所は今年6月、阿武隈川水系で最大規模の降雨を想定した「洪水浸水想定区域」を公表した。担当者「ハザードマップの策定に役立ててほしい」と呼び掛けている。

▲ 流木が橋の上に押し上げられた梁川町(現伊達市)の広瀬川万代橋＝1986年8月5日午前10時30分

「阿武隈川の水位が分からなかった。情報が早く伝わっていただければ、被害を抑えることができたはず」。伊達市保原町の元消防団員、東城藤吉さん(78)は険しい表情で当時を振り返る。

86年8月5日。早い時間帯から「バケツをひっくり返して」たよなとしゃ降りの雨だった。消防団の指示役を務めていた東城さんの元には、各所から要請が寄せられた。「家に水が上がった。何とかしてほしい」「土砂を積んでくれ」「排水処理しないと地域が水に沈む」。東城さんが担当していた旧

保原町大泉地区で、動ける消防団員は20人ほど。優先順位を付けて対応するしかなかった。情報は少なく阿武隈川の状況が伝わってこなかったのだ。車で川を見に行った。川に着くと堤防から1メートル下まで水位が上がっている。茶色の泥水が流れ、材木やドラム缶が漂っていた。「この分だと堤防を越えるんじゃないか」と不安になった。川の状態をよく知らなかった人は逃げ遅れて家に取り残された。情報量も増えた。

しかし、東城さんは「今の世の中、絶対大丈夫とは誰も言えない。30年の節目を水害について考える機会にしてほしい」と警鐘を鳴らす。「災害は慌たたくなくやってきて通り過ぎる。時間がたてば正しいことを忘れるのが人間。事前の準備をしっかりと、自分の命を大切にしてほしい」

阿武隈川 昭和61年 8.5水害から30年 ~水害について考えよう~

阿武隈川上流で甚大な被害を出した「昭和61年8月5日洪水」から、今年で30年。県内では浸水約1万4千戸、全半壊56戸、死者3人の被害を出しました。洪水から30年が経過した今だからこそ、記憶を風化させずに防災意識を高めていくことが大事です。

「阿武隈川」は、福島県内を流れる最大の河川で、流域面積は約1万5千平方キロメートル、平均流量は約100立方メートル毎秒です。昭和61年8月5日の洪水は、阿武隈川上流で発生し、下流に伝わり、福島県内各地に浸水をもたらしました。この洪水は、阿武隈川流域に位置した場合には被害が発生した可能性も考えられます。

近年の雨の局地的・集中化・激甚化を踏まえ、今後もハード・ソフト一体的となった対策を進めるため「水防防災意識社会再構築ビジョン」に基づき流域一帯で取り組む予定です。

阿武隈川上流で甚大な被害を出した「昭和61年8月5日洪水」から、今年で30年。県内では浸水約1万4千戸、全半壊56戸、死者3人の被害を出しました。洪水から30年が経過した今だからこそ、記憶を風化させずに防災意識を高めていくことが大事です。

昭和61年8月 阿武隈川での豪雨災害
福島で24時間雨量が264mmに達する戦後最大の豪雨

水害の防止・軽減に向けた阿武隈川の治水対策
被害を受けて広瀬川の激特事業を開始(平成7年完成)整備計画を策定し、概ね30年後に浸水家屋ゼロを目指す

戦後最大の洪水による被害の爪痕
床上床下あわせて約1万4千戸の浸水 蓬瀧川、谷田川、広瀬川で堤防決壊

阿武隈川河川整備計画に基づく予防的治水対策
その後も、平成10年洪水において、3,659戸の浸水、死者20名の被害が発生したことを契機に「平成の大改修」と呼ばれる無埋部の掘削や消流遊水池の整備等を重点的に実施しました。



当時を振り返って

阿武隈川河川国道事務所 国土交通省 東北地方整備局

阿武隈川河川国道事務所は、阿武隈川流域の治水と河川整備の推進を図るため、昭和61年8月5日の洪水を契機として、阿武隈川河川国道事務所を設置しました。この事務所は、阿武隈川流域の治水と河川整備の推進を図るため、阿武隈川河川国道事務所を設置しました。

あわせて行動!

- 住んでいる地域の洪水ハザードマップを確認
- 避難場所と避難ルートを確認
- 避難場所への移動が危険な場合は、建物の2階以上へ一時避難
- 最新の気象情報や防災情報を確認

巡回パネル展

国土交通省福島河川国道事務所は、阿武隈川流域の治水と河川整備の推進を図るため、巡回パネル展を開催しています。おうちの洪水ハザードマップなどのパネルを展示しています。

情報を収集!

地域の情報を収集・把握し、危険を回避しましょう。

福島河川国道事務所のホームページでは、阿武隈川の水位と雨量の状況をリアルタイムで配信しています。スマートフォンやパソコンで確認できます。また、テレビ放送でも、地域の河川防災情報(水位・雨量)を見ることが出来ます。

- 【本宮市】えびさか/【展示】8月8日まで
- 【福島市】R福島駅西津島通/【展示】8月8日まで
- 【伊達市】伊達市役所山田分庁舎/【展示】8月16日まで
- 【二本松市】二本松市市民交流センター/8月9日~22日
- 【国見町】新月台文化センター/8月17日~28日
- 【大玉村】大玉村農村環境改善センター/8月23日~9月1日
- 【会津若松市】会津若松市役所/8月29日~9月6日
- 【玉川村】玉川村就業改善センター/9月2日~14日
- 【福島県】にびこむ/9月7日~30日
- 【福島県】川市中央公民館/9月15日~30日

資料提供 国土交通省 東北地方整備局 福島河川国道事務所 TEL.024-546-4331(代)

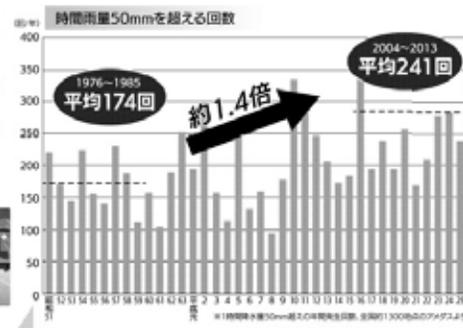
阿武隈川 昭和61年 8.5水害から30年

近年の阿武隈川の出水

線状降水帯で高まる水害リスク

平成27年9月関東・東北豪雨では、大きな被害は発生しなかったものの、**線状降水帯**の雨量が、阿武隈川流域に位置した場合には被害が発生した可能性も考えられます。

近年の雨の局地的・集中化・激甚化を踏まえ、今後もハード・ソフト一体的となった対策を進めるため「水防防災意識社会再構築ビジョン」に基づき流域一帯で取り組む予定です。



もし、線状降水帯がとどまったら...

▼関東・東北豪雨での線状降水帯

阿武隈川流域

平成27年9月10日 午前7時

平成27年9月10日 午後2時

防災意識を高めましょう!

台風前線の温帯低気圧が県内に豪雨を降らせ、阿武隈川流域に甚大な被害を与えた。浸水は約一万四千戸。被害総額は一千億円に達し、多くの県民の記憶に残る大洪水となった。

昭和六十六(一九八六)年の「八・五水害」からきょうで三十年になる。当時の本紙に「豪雨直撃、被害相次ぐ」「流れ狂った阿武隈川」など、大きな見出しが並ぶ。被害の大きかった旧栗川町(現伊達市)では阿武隈川や支流の広瀬川などが氾濫し、多くの住宅が水浸しになった。町職員として対応に奔走した五十年代の男性は「予想を超えて激流に水位が上昇し、激流が中心街に流れ込んだ。なすすべもなく住民が取り残されてしまった」と振り返る。国土交通省福島河川国道事務所は十七日まで伊達市栗川分庁舎で「八・五水害」のパネル展を開催している。

あぶくま抄

台風前線の温帯低気圧が県内に豪雨を降らせ、阿武隈川流域に甚大な被害を与えた。浸水は約一万四千戸。被害総額は一千億円に達し、多くの県民の記憶に残る大洪水となった。

昭和六十六(一九八六)年の「八・五水害」からきょうで三十年になる。当時の本紙に「豪雨直撃、被害相次ぐ」「流れ狂った阿武隈川」など、大きな見出しが並ぶ。被害の大きかった旧栗川町(現伊達市)では阿武隈川や支流の広瀬川などが氾濫し、多くの住宅が水浸しになった。町職員として対応に奔走した五十年代の男性は「予想を超えて激流に水位が上昇し、激流が中心街に流れ込んだ。なすすべもなく住民が取り残されてしまった」と振り返る。国土交通省福島河川国道事務所は十七日まで伊達市栗川分庁舎で「八・五水害」のパネル展を開催している。

3:「昭和61年8月5日洪水から30年」の座談会に関する報道

●福島民友新聞 平成28年10月6日(木) 22面

8・5水害 記憶後世に



水害を振り返り、対策などを語り合う参加者

福島で座談会

県内の阿武隈川流域で甚大な被害をもたらした30年前の1986(昭和61)年に発生した「8・5水害」の記憶を後世に残そうと、福島河川国道事務所は5日、福島市で初めて座談会

自助・共助の重要性語る

を開いた。未曾有の洪水被害を経験した消防団員や行政職員らが当時の経験を振り返り、住民主体の避難に伴う自助・共助の重要性などについて語った。

昨年9月の関東・東北豪雨など局地的な豪雨被害が相次ぐ現状を受けて、洪水の恐ろしさを忘れず、地域一帯となって水害に備えてもらうことを目的に開催。8・5水害の経験者ら8人が当時を振り返り、水害対策などについて議論を交わした。

被害の様子については旧梁川町(現伊達市)の自営業金子三男さんが店舗1階部分が浸水したと報告。水の量が多くて店の被害は大変だった」と振り返った。また当時、梁川町の対策本部で指揮官を務めた佐藤昭治さんは、避難しない人への対応に苦慮したことなどを話し、災害時に町内会が住民の避難活動に果たす役割について言及した。

同事務所によると8・5水害では伊達市の広瀬川で2カ所の堤防が決壊、死者3人、住宅の全半壊が56棟、床下・床上浸水が約1万4千戸などの被害があった。

●福島民報 平成28年10月9日(火) 11面

洪水への備え確認

「8・5水害」経験者語る

福島



当時の状況を振り返る参加者

阿武隈川流域に甚大な被害をもたらした昭和六十一年の「8・5水害」の経験者が当時の記憶を語り合う座談会は五日、福島市の杉妻会館で開かれた。

佐藤昭治さんは当時梁川町(現伊達市)の災害対策本部で指揮を執った。避難時に町内会が果たす役割の重要性を語った。

国土交通省福島河川国道事務所の主催。昨年九月の関東・東北豪雨など大雨による被害が相次ぐ現状を受け、洪水に対する備えの大切さを知ってもらうと企画した。消防団員や行政職

員、住民ら八人が参加した。

福島河川国道事務所によると、8・5水害では阿武隈川上流全域で被害が発生し、死者三人、住宅の全半壊五十六棟、床下・床上浸水約一万四千件に上った。



福島地整

後世へ教訓語り継ぐ

昭和61年
8・5水害 発生30年で座談会

東北地方整備局福島河川国道事務所は5日、福島市の杉妻会館で、昭和61年8月5日洪水発生当時の様子を振り返る座談会Ⅱ写真Ⅱを開いた。水

害発生から今年で30年が経過。当時の記憶を風化させず後世に伝えていくと開いた。水害を経験した当時の消防団、被災者、行政関係者7人が災害の状況を語り、大規模化する近年の水害への教訓について意見を述べた。

約50人が出席した。石井宏明所長は「27年9月の関東東北豪雨や、今年岩手県と北海道を襲った台風10号は記憶に新しく、近年水害に対する緊張感が高まっている。過

去の記憶を風化させず、今後の貴重な教訓として語り継いでいきたい」とあいさつした。

同事務所の中野孝建設専門官が8・5水害の概要を説明。参加者は映像や写真を見ながら当時の回想し、困難だった避難誘導や混乱した対策本部の指揮系統、訓練の想定を超えた災害の過酷さを生々しく語った。また、同事務所のハード・ソフト面での水害対策への取

り組みを確認し、悲惨な災害を経験した参加者らと防災・避難に関して意見を交換した。

会場では、9月30日まで阿武隈川沿川10市町村で開催した同洪水に関する巡回パネル展の写真展示も行った。

座談会の内容は今後ホームページで公開されるほか、各種会議やイベント等で配布し、水害に対する防災意識の啓発に使う。

【「昭和61年8月5日洪水から30年の取組」プロジェクトチーム】

- ・河川関係各課より横断的にプロジェクトチームを編成。
- ・パンフレット、パネルの内容や体裁の作成、座談会の運営など、中心になって行った。

建設専門官（調 一） 中野 孝

PTリーダー、全体の総括

建設専門官（用 一） 悪原 幸治

座談会運営全般（関係自治体との出席者調整及び出席者本人との交渉等）

指 導 官（松川庁舎） 武田 恒弘

巡回パネル展開催場所の調整、展示パネル作成

河川管理課 係長 猪熊 茂

巡回パネル展開催場所の調整

工務第一課 技官 見山 智明

展示パネル作成

調査第一課 技官 尾崎 光政

パンフレット作成

「昭和61年8月5日洪水から30年の取組」活動報告書

平成29年1月発行

編集発行：国土交通省福島河川国道事務所

協 力：(一社)東北地域づくり協会

制 作：(株)ナカガワ事業部

